

演劇レーベル Bo-tanz 第十回公演台本

ツタの絡まるシヤベルで……

登場人物

三流劇団「ぼを・たんつ」の人々

小松和人

三森信

茂木公一（もつくん）

藤原時起夫

小埜咲智

キャサリン大塚

木暮崎剣

謎のダウンジングじじい

伊藤大造

シャベルを持った渡り鳥

伊藤智久

一 導入はいつも前説

一九九六年、二月。東京都、豊島区、池袋、シアターグリーン。

モギリのテーブルを過ぎ、ドアを抜け、薄暗い劇場に入る。

室内は想像したほど寒くはない。立ったままコートを脱ぎ、椅子に腰掛ける。

舞台の上では、一人の男(茂木)が漫談家のように軽いトークを繰り広げている。

茂木

……本日は、演劇レーベル・ポータンツ第十回公演「ツタの絡まるシヤベルで……」にご来場くださいますことありがとうございます。劇団を代表いたしまして、お客様の皆様に厚くお礼申し上げます。昨年当シアターグリーンで恥ずかしながら繰り広げてしまいました劇団内情ドタバタ芝居「アモーレの鐘はもう聞こえない」では、多方面の方々から応援やお叱りをいただきました。(懐から、何やら紙切れを取り出し)……「珍妙な題名に誘われ飛び込みで見ただですが、ぶつちやけた話、感動してしまいました。何だか、生きる勇気がわいてきたという感じです。二十五才・男性」……どうもありがとうございます。こう言ってもらえると、ぶつちやけた話、わたしどもも「生きる勇気がわいて」来ます。……「なんていうか、話も役者もみんな暑苦しい。九才・女性」……九才! ……女性……九才! ……どうも申し訳ございませんでした。当劇団では「熱い芝居」をモットーにしているものですから、どうも「熱い」といつしよに「苦しい」が二人三脚してしまう嫌いがございます。以後、「苦しい」の方をできる限り削減し「熱い」の方を独り歩きさせていくように心がけたいと思います。目指すべくは「涼しげな熱さ」といったところですね。何じゃそりゃ? ……「このような劇団内情物の芝居は君達のせつかくの才能を枯渇させる恐れがある。(中略)……今後の君達に期待したい。推定四十五歳・男性」……そうですか……やっぱり、だめですか、劇団物。せつかくの才能を枯渇させますか。実は私たちが危惧していたのですよ、危険じゃないかって……というわけで、今回の新作

「ツタの絡まるシヤベルで……」は、反省の意味も含めまして、「アモーレの鐘はもう聞こえない」の続編です。またまた、あの劇団が主人公ですってーことは、反省の色がないってこと? いえいえ、重々反省しておりますってーことにしておいてね、ここだけの話……まあ、大地震だの、毒ガスだの、原爆だの、ナトリウム漏れたの……何だか分からん激動の一九九五年も過ぎ去って、今年も一九九六年。二〇世紀もあと五年。六年後には、夢の二十一世紀なんだから……そんなこんなで「なんか、うかうかしてられないぞ!」って感じだけど、あの三流劇団《ぼを・たんつ》の脚本家小松君は、今回もご多分に漏れず、公演を間近に控え煮詰まっているみたいですよ。とかく脚本というものは猫と同じで呼べば来るといった類のものではないですね。遅筆で有名な小松君なら、なおさらでございます。はてさて今度はどんな芝居になるのやら、前説担当の私も、楽屋におります役者連中にも、脚本家の小松君にすら分りません。(客電が暗くなっていく) その昔、誰かがこんなことを言いました「劇場の闇は夜の闇より暗い」……確かに一寸先も見えません。(劇場は完全に暗転する。と、暗闇の中で小さな激突音!) ……あつ、いてえ! 柱に小指ぶつけた……(ちなみにフォローは何もありません)

と、突然、暗闇から声! 「福々亭 至楽(シラク)、新作落語・ぶるとでどっかん!」 間髪入れずに軽妙なお囃子が流れ込んでくるーそれも大音響だ!

明転ー結構まぶしい。舞台の上には一枚の大きな座布団。舞台の袖には演目を記した半紙。そこには勘亭流でこう書かれている……「福々亭 至楽(シラク)、新作落語・ぶるとでどっかん!」 小意気に羽織を肩にひっかけた落語家お囃子にのって登場だ。……あつ、よく見ると、こいつは三森だ!

(人なつこい笑い顔で客席を見渡したあと徐ろに)……巷では雨が降るってーと、若いも若いも帽子をかぶるのが流行っておるよう……(小さく息を吸う

三森

擦過音が響く)：なんでも、雨にあたると頭が禿げる、なんてことを申しまして……(小さく息を吸う擦過音がまた響く)：全く、愚にもつかぬことを言い出す輩はいつの時代にも居るものですね……(小さく息を吸う擦過音が響く)……(まくらは終わって、話は急展開する) (こ隠居、ごいんきよおー：どうしたんだい八つあん。血相変えて…… どうもこうもねえよ、ご隠居。てえ変なんだよ。なんでも海の向こうの大工の棟梁が火花を打ち上げてるってうわさが、そこかしこで、どっかんどっかんよ…… 八つあん。そりゃ大工の棟梁じゃなくて、大統領だろ…… そうそう、それぞれ。その大統領よ…… それにね、八つあん。火花じゃなくて原子爆弾というものだよ…… げ、げ、げんし……なんだって?…… 原子爆弾じゃ…… 爆弾って言ったらどっかんどっかんか?…… まあ確かに使い方によつたら危険もあるんだが…… 使い方とかじゃなく、あぶねえんじゃねーのか?…… だから八つあん、これは抑止力といってね…… 良く、しごく?…… よく、しりよく!…… 行く、地獄?…… (こ隠居、切れる) おうおうおう、さつきから聞いてりやあ、いい気になりやがって……この俺様を誰だと思つてやがるんでえ! おいらは遠い異国のおフランスの……とーりよーだぜ! むつしゅー、まどもあぜる(フランス語で怒つてるみたいよ、ご隠居したら)…… どうしちまつたんだよ、ご隠居? なんかいつもと様子が…… うるせえやい、ヨーロッパの平和は誰が守つてやつてると思つてんだい。このすつとごいこのこまんたれぶーが!

三森、怒り心頭で立ち上がる。と、暗い客席から女の声、「シラク!」

三森の言葉が途切れた。シーリングライトの逆光を遮るために額に翳された左手……その下で忙しなく動いていた二つの瞳が不意に止まる。

あらかじめ決められていたかのような一瞬の沈黙……だがしかし、女がそれを破る。「シラク……」

そう呼ばれて、落語家は答えようとした。即座に答えなければと思つていた……だが、口の中は一瞬のうちにカラカラに渴き切つてしまい、彼の言うことをうまく聞いてはくれない。もつれる舌をやつとの思いで動かし、彼は女の名を呼んだ。

……ムルロア。

あたしを捨てるの? わたしの心をこんなに穴だらけにして……(あつ! こいつ小埜咲智だ!)

……捨てるわけじゃないか。

用が済んだら、さよならするのね? そうなんですよ? (咲智は、暗い客席の中、幾筋ものスポットライトに浮かび上がっている)

……何を言い出すんだ、ムルロア。

シラク……たしかに、私の心は玄武岩質の固い岩盤でできているように見えるかもしれない。でもそれは、うわべだけのことで、ただの強がりなのよ…… 今までの皆さんの男がわたしを愛しては、また通りすぎていったわ。そんな期待と絶望の中で、たつたひとつ、私が手に入れたもの……それがこの強がりだったの。孤独に押し潰されなれたための悲しい演技。自分まで騙す、質の悪いうそ…… やめろ!

シラク……あたし、あなたが思っているほど強くはないのよ……

(彼女のひとみに涙に光っているのに気づき)……ムルロア……お前泣いているのか?

三森が言い訳でもするように一歩前に足を踏み出したその刹那!……客席でついに小松が叫んだ! 「つまんね……」

小松 (客席でやおら立ち上がり) やめだ! やめやめ

三森 (素に戻って)へ?
小松 やめって言ったのが聞こえねーのか!

劇団員たち、いろんなところからわらわら舞台上に集まってくる。小松は客席に突っ立ったまま、劇団員と対峙する。

三森 ……やめって、どこをやめるんですか?

小松 全部じゃ!

全員 全部?

咲智 どうして?

小松 つまらんからじゃ!

と、客席後方から木暮崎剣が偉そうに現れる。腕組みなんかしている。

木暮崎 確かにこのシーン、このままじゃつまらねーよな。だって三森と咲智だろ?ま

あ、俺様とキヤサリンクラスじゃねーと売り物になんねーべ (ヨコスカ訛り)

小松 うっせー、たこ作! ……もとはといえば全部お前のせいじゃー! (剣の首を絞める)

木暮崎 あう、あう…(苦しがる)

小松 もつくん、その演目書いた紙、勘亭流の持つてきてくれ。

茂木 あつ、はい…

小松の迫力に圧倒され、素直に演目台を小松のところに持つていく。
その半紙をビリビリに破く小松。

小松 なにが「福々亭 至楽」じゃ、なにが「ぶるとどどっかん」じゃ。
大塚 あんた、自分で書いたんでしょうが!

小松 これは単なる気の迷いだあ…(と言いながらひざを抱えて力無くしゃがみこんでしまう)

大塚 気の迷いつて…あんたね!

小松 そもそも、この始まりは剣、おまえだ。あの夜、居酒屋『北の家族』でこう言っただろ「あのよー、フランスの大統領のシラクっているだろ? あれって落語家の名前つぼくねーか? なんか、笑福亭とかよ…そんなの頭に付けると座りいいだろ? きっと漢字で『至る楽み』って書くんだぜ!」

木暮崎 そうだ、俺の発案だ。お前それ聞いてげらげら笑ったろう。

小松 それで盛り上がりがあったんだよねー。

茂木 落語家至楽、しかしその過去は夫婦漫才『アトミック・シラク&ムルロア』の名つ

つこみ。

咲智 数年前に相方のムルロアを捨て独り立ちした男。

三森 そんな愛憎劇に原子爆弾風味を加えて、パンチの効いた作品に仕上げよう…

小松 つて仕上がるか? それだけで一二〇分引っ張りきれるのか? 否! そんな

ことは出来ない!

大塚 出来るよ。あんた爆弾好きじゃない。

全員 そう、そう。(頷く)

大塚 書いた台本の八割方、爆発あるじゃん。

全員 うん、うん。(頷く)…とりあえず、どっかん!

小松 みんな気付いてたの?

木暮崎 アヒルでも気付くぜ!

小松 アヒルは字が読めませーん! (と、小学生みたいな突っ込みを入れる)

全員 だから、小学生みたいな突っ込みを入れるな!

小松 (すねる) そんなにみんなして怒んなくても…

全員 すねるな!

小松 (床にの字を書く)

全員 の字を書くな!

小松 (泣く)

全員 泣くな!

小松 (唐突にスキップする)

全員 だからって、唐突にスキップするな!

小松 というわけで、一からつくり直し!

全員 えっ?

小松 一からつくり直し!

咲智 一から?

木暮崎 いいじゃん、シラクで! 公演迫ってるんだし...

三森 前回懲りてるのに、また?

大塚 学習能力のないやつ...

小松 学習能力がないだと! 今の発言者、手を上げ。

大塚 はい。(手を上げる)

小松 学習とは、事なきを得るために力を入れず物事を楽にこなすことを学ぶこと

大塚 なのかね? 否、学習とは常に前進であり挑戦でなければならぬ!

大塚 だから、この挑戦は危険過ぎるって言うてんだよ! 崖っぷちに向かつて目隠し

小松 したまま駆け出すのとおんなじだぞ...

小松 自殺行為、多めに結構。朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なりでございま

大塚 す。

大塚 何いつてんだか、このタコおやじは...

小松 はっはっは、そんなわけで、藤原君!

藤原 (調光室から答えて) なんすか、小松さん?

小松 君んちのあの本栖湖の別荘、どうにかならない?

木暮崎 おつ、今度は別荘で缶詰めか?

小松 違う! 合宿じゃ!

全員 合宿?

藤原 (調光室から飛び出してきて) ...おことばですが、小松さん。あそこは、もう

パパの会社の物じゃないじゃないかな。何か、売りに出すとか、出さないと
か...

小松 売れちゃったのか?

藤原 さあ?

小松 玄関の鍵は変わったか?

藤原 ...どうしてそんなことを?

小松 (ポケットから鍵を取り出し) おとしの夏に行ったとき、富士吉田のミスタ

ー・ニットで合鍵を作っておいた。

全員 おー...

藤原 それ限りなく犯罪に近いんじゃないですか!

小松 まっ、なにはともあれ、とりあえず行ってみましょ。

藤原 だめですって、小松さん。

小松 それから、藤原君。君のパパのレンジローバーまた借りてきてくれないか?

藤原 出来ませんよ。ぼくのカマロなら...

小松 カマロには全員乗れんだろ。まあ、いやと言うなら強攻手段にでも良いが...

藤原 (ポケットからもう一つ鍵を取り出す)

藤原 そっ、それは...

小松 おとしの夏、富士吉田のミスター・ニットで...

藤原 あんたって人は...

小松 さあ、みんな!

全員 レッツゴー、合宿!

藤原 げんなり...

全員、舞台上でストップモーション。

みんな目が輝いているーただし藤原以外。

二 カマロでゴー、ゴー

暗転と同時に、舞台袖にサス。先ほどの前説男(茂木)がいる。

茂木

僕はバカなんでしょうか？ そうです。ともあれ—何が「ともあれ」だか分かりませんが—こうして、ぼを・たんつの面々は本栖湖へと旅立つのであります。大金持の藤原君がお父様から超法規的手段で借りてきたレンジローバーは劇団員を乗せ中央高速を飛ばしています。おや？ 耳を澄ますとなんとも珍妙な歌声が聞こえてきます…

舞台上から大塚の珍妙な歌声が響いてくる。

「…もとす、しようじん、にしのうみい」

ゆっくり明転していくと、舞台上に小松、大塚、茂木、三森、咲智、藤原。なんだか車に乗っているようだ。運転は三森、助手席には藤原。他の奴等はその後ろ。小松なんかは最後方の椅子に偉そうにふんぞりかえっている。

茂木

…キャサリンさん、何ですか、今の？

大塚

「富士五湖の歌」に決まってるだろ。

茂木

富士五湖の歌？ あるんですか、そんなもん？

大塚

あたぼうよ！

三森

(ハンドルを握りつつ)…今作ったんだろ！

大塚

作って、ないない、嘘つかない。ガキの頃のバス遠足でさ、ガイドさんが歌ってくれたんだよ。

三森

聞いたことねえぞ、咲智、お前あるか？

咲智

(狂ったように菓子を食べているが、首を横に振る) ない。

藤原

…じゃあ、もういつべん歌ってみてください。

大塚

のぞむところよ！ 行くぞ—！…もとす、しようじん、にしのうみい」

三・藤

(同時に後ろを振り返り) さっきと違うぞ！

大塚

おんなじだよ。ねっ、もつくん。

茂木

(かしこまって) すいません。僕の耳は微妙な音程変化を認識できないみたいなんです。

三森

素直に「音痴だ」って言えよ。

茂木

面目ありません。

茂木

茂木に単サス。

茂木

はい、ここで一旦停止。(全員ストップモーション) ここで本栖湖までの短い時間を利用してちよいと登場人物の人となりを見てみましょう。

…車を運転しているこの男。名前は三森信といいます。この三流劇団ぼを・たんの一の性格俳優。ただし舞台の上だけの話で普段はごく普通のフリーターなのを私は知って…(三森がカメラのシャッター音を小さく口ずさみながら間欠的にポーズを決めているのが目に留まり)…何やってんですか？

三森

…いや、プロフィール紹介をスチルで構成したらどうかと思つて…カシヤツ、カシヤツ、カシヤツ…(懲りずにまたやっている)

茂木

(目頭を抑えてしばし、怒りを沈める)…この助手席におはしまするは、この劇団の金銭的支え、藤原時起夫だ！(藤原君、ポーズ) 藤原君のパパは？

藤原

金持ち。

藤原

藤原君の演技は？

茂木

いまいち…

藤原

私こと、茂木公一はこの劇団の専任もぎり—いわゆる切符きりだ。人呼んで、モギリのもつくん！！ どうして舞台に立たないのかと言いますと…(答えず)

全員

うとするが、皆がそれを制し…)

茂木

なに言つてんのかわからねーから！

茂木

面目ありません…はい、気を取り直しまして…見た目は幼いが年は食つてる、

年齢秘密の小埜咲智だ。

咲智 ……夜のお仕事をしようと面接に行っただけど、スナックの店長にやんわり断られました…なぜ？

茂木 この劇団の紅一点！…

咲智 ちよつと待て、女優、女優…(自らを指さす)

全員 お前は子役だろ！！

茂木 というわけで、谷間に咲いた一輪の徒花、キャサリン大塚

大塚 なんだ、そりゃ？

茂木 あの超人氣女の子劇団ワンナイトシンデレラにいたというスゲー過去を持つ、

一緒にいると愉快だが厄介なやつだ！

大塚 ……結構、臺立つてまーす。

茂木 そして最後に、この劇団の劇作家であり演出家、要であり同時にアキレス腱で

もある、小松和人だー！ (小松、ちよつと元気がない) 小松和人だー！…

あれ？ どうしました小松さん、顔青いですよ。

小松 ーん、だいじょうぶ。(でも、なんか変だぞ)

咲智 ……小松、さては乗り物酔いだな！

小松 ……ちよつと(でも吐きそう…)

咲智 お前、飯食わずに来たろ。空腹はいけないんだぞ！ これ、このイチゴポッキー

食え。(と、小松の口もとにイチゴポッキーを近づける)

茂木 あーっ！ (咲智、そいつは危険だ！ イチゴポッキーの取って付けたような香

りが、やつの嘔吐中枢を刺激す…)

小松 (ほっ。たがばんばんに膨らむ)

咲智 あっ、吐いた！

小松 (耐える)

咲智 あっ、耐える…

小松 (飲み込む)

咲智 あっ、飲んだ！

小松 (死にそうな声で) ……だいじょうぶ

全員 (胸をなで下ろす)

茂木 と、三流劇団ほを・たんつはこのような頓狂なメンバーで構成されていて…と、

ちよつと待てよ、誰か大事な人を忘れていませんか？

全員 (唐突に思い出し) あっ、剣！

茂木 剣さん、忘れてきた！ ……なんと私たちは、あの平成のお調子者、看板役者

であるところの木暮崎剣を忘れてきてしまったのでした。

咲智 なんて気付かなかつたんだろ？

大塚 きつと今ごろ、アトリエで独りぼっちでポストンバック抱えながら「ドナドナ」口

ずさんでるぞ。

三森 ……やばいこしちやっとな。

茂木 引き返しましょう。ねえ、小松さん。

小松 ーん？ うん…(乗り物酔いで、涙目になつてる)

茂木 役に立たない人だな、この人は！ 三森さん、とにかく次のインターで降り

て…

三森 そうだな、めんどくさいけど、しょうがねえか…

咲智 そうそう、このままだと一生言われ続けちゃうよ「人でなし」とか「人非人」と

か。

茂木 ……その通り！ 剣さんはけっこー根に持つタイプだから、高速道路逆走して

でも帰るべきです。ねっ、藤原くん？

藤原 ……いえ。

茂木 えっ？

藤原 戻る必要はないと思います。

全員 何言つてんの、藤原くん！？

藤原 だから、戻ることは…

茂木 藤原くん！ 君って人は！ ……小松さん、何か言つてやつててください！

小松 (怒ってるんだろうが、吐きそうなの)……うえっぶっ。

咲智 もつくん、もうこいつ(小松)にふるなよ……
茂木 すいません。

三森 お前、なにか？ もう剣はいらねーと思ってるんだろ！ この劇団なんか、三森さんとお前がいれば充分だって考えてるんだろ！ ああつ？

藤原 ……自分自身の深層心理を僕に投影しないでくださいよ。違うんですって……
実は……そう、あれは昨日のことでした……

木暮崎、舞台後方から、「合宿、合宿……」と、飛び出してきて、藤原の肩を抱く。木暮崎・藤原に明かり。

木暮崎 ……藤原クーン、合宿だね？

藤原 僕にとっては「がっくし」です

木暮崎 (大仰に受けて) はっはっはっ、藤原くんってほんとに駄ジャレがおじよーず。

「おじよーず」ついでに、ひとつ剣さんのお願ひ聞いてくれない？

藤原 なんですか、その「おじよーず」ついでって？

木暮崎 ねえねえ、お願ひ聞いてよ、ねえねえ……

藤原 なんですか、気持ち悪いなあ、もう……

木暮崎 ……いやね、頼みというのは他でもない。今度の合宿のとき車貸してくんない？

藤原 だから、パパのレンジローバー借りてきますよ。あれならみんな乗れるで……

木暮崎 ちがうの！ きみのカ・マ・ロ。

藤原 カマロ？

木暮崎 そう！ ほら、俺ってさ、この劇団の看板だろ。だから合宿行くのも雑魚と一

緒の乗り合いバスじゃカッコつかないだろ？ だから、きみのカ・マ・ロ。

藤原 かつつくもつかないも、剣さん免許持ってるん……あつ、最近練習すつぽかしま

くつてるのには、そんなわけが！

木暮崎 ご名答！ (巨大な免許を取り出して)……とつちやった！

藤原 おおつ、でかい！

木暮崎 俺様の特製だ。

藤原 そんなの勝手に作っちゃっていいんですか？

木暮崎 勝手じゃない。自分の免許証を手本に忠実に十倍に拡大したものだ。

藤原 それって公文書偽造……

木暮崎 よし、決まった。カマロでゴーゴー！ ただし俺だけ……

木暮崎退場。明かりもとに戻る。

全員 ……それで貸しちゃったの？

藤原 うん。

三森 バカか、お前は？

茂木 カマロを！

咲智 免許取りたての初心者に！

大塚 それも、あの木暮崎剣に！

小松 (何か怒っているが、同時に吐き気も起こる)

全員 あんたはいいから座つてろ！

藤原 ……しょうがないでしょ。みんなも剣さんの強引さは分ってるでしょ？ (ちよつと泣きそう)

茂木 ほんと、剣さんがまだこの世の人であればよいのですが……

全員 (睨む)

茂木 ……失礼いたしました。……それにしても困った人達です。はてさて、これからどうなりますことやら、かいかも見当つきません。これから先は霧の中、真つ暗

やみの霧の中。

全員 (男に呼応するように、より芝居がかつて) 劇場の闇は夜の闇より暗く。

茂木 人の心の闇はそれより暗い。

全員 俺たちが向かう先には？

茂木 漆黒の淵 (タンバリン一発！——小笠咲智だ！)

藤原

全員(女) 毒無しサンリのルポルタージュ (タンバリン二発! —キヤサリンだ!)

全員(男) 透明オウムの大津波の吹聴 (タンバリン三発! —木暮崎だ!...やっばりやめた)

茂木 演劇レーベル ボー・タンツ 第十回公演「ツタの絡まるシャベルで...」
全員 ここに開演!

なぜかみんな楽器を持っているぞ。あれ? 剣もいるぞ! あれれ、あのじいさんは誰だ? タンバリンのリズムに呼応してギターのカッティングが切り込んでくる!

「ツタの絡まるシャベルで」

闇夜のマリオネットファクトリーでは

6本指の子供たちが列をなして

行き着く先には、電飾だらけの裁断機

過剰なものは地の底で

息もせずに眠るだけ

鳥は空を飛ぶのと引き換えに

自分の名前を土に埋めた

人は生きていくために

たくさん夢を深く埋める

俺たちは土の下に

一体何を埋めたのか

退屈の連続の中で

一体いくつ埋めたのか

きつと真新しい鉄のシャベルで

何を埋めてしまったのか

5本指の子供たちが鎖につながれ

むせ返るような霧の中へと歩いて行く

行き着く先には、赤く染まった圧搾器

失った指は地の底で

掘り返される夢を見る

黒い影に隠された

ここより先の闇の向こうを見るために

殺人ノイズに満たされた

ここより先の微かな音を聞くために

ツタの絡まるシャベルで

俺たちは何を掘り起すのか

錆びにまみれたシャベルで

一体何を掘り起すのか

朽ちた木の柄のシャベルで

一体何を掘り起すのか

そして舞台は暗転する。

三 その時剣は談合坂にいた

風の音。舞台中央に木暮崎、でも真つ赤なスーツで、金髪だぞ？
なんか、げんなりつて感じ……

木暮崎

……あーあ、なんでこの平成のスーパーヒーローの木暮崎様がこんな談合坂サービスエリアで無料のほうじ茶なんか、それもこんな検尿みたいな紙コップで飲んでなきやならないの？（傍らのカマロに視線を移し）こつちから見るとかつこいいカマロ！でも……（カマロの逆サイドに回り込んで）こつちから見ると傷だらけのカマロ……あー、なんで……（と、げんなりするが急に怒り出す）それにして許せないのは、あの山梨ナンバーのボックスカーだよな！三〇メートル手前で急に割り込んで来るんだもん……車間距離は時速一〇〇キロで一〇〇メートル、時速三〇キロで三〇メートルつて教習所で習ったろ！俺びつくりしてハンドル切つちやつたら、こうだものな……藤原に一体なんて言い訳しよう……（天を仰いで）あーあ、雪まで降ってきたじゃねーか、それもどつかんどつかん……あつ、カマロの屋根付けなきや、（こ）そ（こ）をやっているが、結局屋根の付け方が分からず、隣の人に聞く）すいません、カマロの屋根知りませんか？……つて、知らないよね……（力なく笑い）せつかく黄色いカマロにあわせて、こんな真つ赤なスーツ着てきたのにな……（ふと遠くを見て、何かに気付く）あつ！あれは、さつき割り込んできたボックスカーじゃねーか！へっ、（こ）であつたが百年目よ！（やおら駆け出す木暮崎。ボックスカーのドアを開け怒鳴る）くら！さつきはよくも……（木暮崎の音が弱まる……どうしたの？運転手がきれいな姉ちゃんだったみたいよ）あつ、美人……（急に調子を変えて）いや、これは何かの勘違いだったかな……僕としたことが……おきれいですね、その長い黒髪。そして、よくお似合いだ、その白いサテンの服。僕のこの赤いスーツとびつたりつて感じだ……（こ）こでこうして僕らが会えたのも、神様のお目こぼし、いや違った、おぼしめしさ……（と、木暮崎、誰かに両の腕をつかまれ、引

つ張られる演技。左右を見て）……おーい、君達、何をするんだ？僕は今（こ）のお嬢さんとナイスなトークをしているんだ。やめたまえ、失敬だな！（運転手のとこに再び歩み寄り）……全く、無粋な奴もいるものだ。お嬢さん、紹介が遅れましたが、僕は木暮崎剣。君の名前は？あと出来れば、電話番号と住所を……（と、再び誰かに両の腕をつかまれ、引つ張られる演技。左右を見て）……こら、やめたまえ、君達。何なんだ、君達は？何故俺が、お嬢さんとお話しするのを邪魔するんだ？ははーん、分かつたぞ。お前らおいらの恋路を邪魔する気だな、そうならこつちにも考えがあるぜ……（と、一人で見栄切つてるうちに、周りの誰かさんはそのボックスカーに乗り込んでみたみたい、そして、発進しちゃう車）……こら、ちよつと待て、お前ら。俺の話聞け……（追いかけるが転んでしまう木暮崎）……あつ、痛て、転んだ！こんなエナメルの靴なんか履いて来るんじゃないやなかつたなんて言ってるうちに……ち、ちよつと待てよ、こら！特にそこのおねえさん！ちよつと待って、せめてお名前だけでも……

男 あつ、シャ乱Qの人だ！シャ乱Qの人だ！

木暮崎 （男に気付き） シャ乱Q？

男 シャ乱Qの人ですよね……

木暮崎 （服装の乱れを直し）……まーね、よく言われるんだ。

男 えっ、じゃあ違うんですか？

木暮崎 いや、そうでもないんだ。シャ乱Qのつんくとはマブダチなんだ。おれたちつんく・むんくつて芸名で呼び合う仲なのよ。

男 ムンク？……荒涼とした北ヨーロッパの平原を感じさせる名前ですね。

木暮崎 はっは、そうかな……（何だかわかんないけど、照れ隠しに笑ってるみたいよ）

男 じゃ、これにサイン下さい。そうそう、そこそこ……智久くんって書いてね……

(強引にサインさせる) ……あつ、どうもありがとうございました。

木暮崎 なーに礼なんかいらねえよ……

男(智久) ……ふーん、つくくの友達ねえ？ ムンク……やっぱりいらねえ！ (つて、破いちやう)

木暮崎 こら、おまえ！ いい加減になんだけどせつかく書いてやったそれを粗末に……

(ここまで言ったところで、木暮崎が語を切り、遠くを見つめる)

智久 なんだ？

木暮崎 彼女俺のこと見てる……車の窓明けて……

智久 (木暮崎と同じ方向を見て)ほんとだ、さっきの女の人だね。

木暮崎 (俯いて、自嘲的に笑い) ふふつ、あいつ俺に惚れたな……どうもいけねえな。

俺の存在そのものが、どうやらいたいた女性へのハートをめちやくちやにしちまうみてーだな。ねーちゃん、気持ちちは分かるが、いたずらに俺に惚れるなよ、おいらは天使の姿をしたバージンキラーさつて言ってるうちにもーいねーでやんの。

智久 分けわかんない独白してるうちに行っちゃったね！

木暮崎 そーだね。はっはっは……

二人、肩をたたき合い笑う。

智久 ……ところで、あのひとたちが教団の人達だつて知ってた？

木暮崎 教団？ もう解散したんじゃないのか？

智久 そうなんです……

木暮崎 どーりで、どうも変な奴等だと思っただぜ。あのねーちゃんはおいといて……

智久 それにあの女の人だけど、名前は確か……

木暮崎 おまえ、名前知ってるのか？

智久 そうだ！ けいーさんだ！

木暮崎 けいこ……いい名だ。剣・けいこ……頭文字も同じだ。単なる偶然とはおもえん

な……

智久 け、剣？

木暮崎 俺の本名。ムンクは芸名だ。……でもあんたどうして彼女の名を？ もしかして

教団の人？

智久 いえいえ、教団の信者さんを救済する側に立つ人間です。解散請求・破防法の

適用は出たものの、具体的には何も行われていないという現状だものね。

木暮崎 救済……かっこいいね！ つてことは、これからそっちの方へ？

智久 ええ。上九の方に……

木暮崎 かみく？

智久 本栖湖の方なんだけど……

木暮崎 本栖湖！ 奇遇だね。俺もそっちの方へ……劇団の合宿つーの、なんかそんなの

あつてさ。

智久 げきだん？

木暮崎 そうだ！ せつかくだから、俺たちつるんで走つていこうよ。君が前で俺後ろ。

雪がすごいから、出来れば時速十五キロぐらいで……

智久 ……つるむのはいいんですが、あなたのカマロ、完全に雪に埋まってるよ

木暮崎 あつ！

智久 これ、掘り返すのたいへんそーだよ。

二人 (同時に気付いて) あつ、そうだ方向おんなじだからあんたの(ぼくの)車で……

気が合うね。

木暮崎 そうしよう。君の車は？

智久 このとなりの軽なんだけど……

木暮崎 軽……いいねー、軽。

智久 いいの、カマロ……このままにしといて？

木暮崎 いいの。気にすんなつて……それに俺こっちの方が好き、だつて屋根があるか

ら……さあ、乗ろう乗ろう。(車の運転席側に回り込む男に向かい屋根越し

三森 そんなことどうでもいいから早く入ろう、雪までちらついてきて寒いからさ。

茂木 そうですよ、小松さん。早くお願いしますよ。

小松 おう、シャキーン(ポケットから鍵を取り出す)これが去年の夏、富士吉田のミスター・ミニットでコピーした別荘の鍵だ！

全員 イエーイ(拍手)

みんな「早く明けるー」など、それぞれに歓声を上げる。

小松、鍵穴に鍵を入れようとするが入らない。気を取り直してもう一回チャレンジするが結果は同じである。

咲智 小松、どう見ても鍵穴より鍵の方が大きいぞ！

小松 おい、もつくん。やすり持ってきてくれ、やすり！

咲智 やすりで何をしようというんだよ？

藤原 ちよと小松さんそれ見せてください。あれ、この鍵……まさか……

三森 何が、「まさか」なんだ？

藤原 いいえ、たぶん思い違いだと思うんですけど……なんか裏手の倉庫の鍵に似てる気がするですよ……

と藤原、裏手の倉庫に向かう。それに従うみんな。藤原がのかぎ穴に鍵を差し込み回すと……あな不思議(そんな不思議でもねえか……)

「ガチャ」という音とともに鍵が開いてしまったとき。

全員 あつ……(一瞬の沈黙の後、小松に対して怒りが爆発する)

三森 ……小松、きちんと説明してもらおうか！

小松 ……だつてしょうがないじゃないか、鍵がたっくんあつてさ……そんな中の一番大きなやつが玄関のかなーつて思つて、それコピーしちゃつたの……

咲智 何が「ちゃつたの……」だ！ 全部コピーせよ。

全員 (小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

藤原 小松さんつて、抜け目無いようで、抜けてますよね。(藤原くん、うまい！)

全員 (小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

大塚 そんな抜け作だから、脚本もあがんねーんだよ！

全員 (ますます、小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

茂木 ほんと先が思いやられますよ……

全員 (とことん、小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

などと怒り心頭で小松に詰め寄るみんな。あれ？ よく見ると見知らぬ爺さんが一緒になつて小松に文句を言つてるぞ？

爺さん 最近の若いもんは何を考へておるのか、たるんどる！

全員 (小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

爺さん お腹の肉もたるんどるぞ！

全員 (小松に詰め寄りながら)そーだ、そーだ！

爺さん こんなことだからいのかんじや……そーだ、そーだ！(いつのまにか、みんなの注目を浴びているみたいよ……)

全員 そーだ、そーだつて……誰だ、お前？

爺さん (みんなの顔を見渡し、自らをゆつくり指さす)……わし？

全員 (こつくり頷く)

爺さん わしかい？

全員 そうだ！

爺さん わしは……大造爺さんじゃよ。

三森 大造爺さん？

咲智 ……と、雁(がん)？ (ついボケてしまう)

(劇団員が咲智に突っ込もうとしているのを知つてか知らずか) ガンなんかじゃないよ。わしは健康じゃよ、ただちよと最近前立腺が肥大しての……

三森 誰が二重ボケかませって言った？（…誰も言ってません）そうゆうことじゃなくて、どうしてここにいるのか聞いているんだよ！

大造 わしが？

全員 そう！

大造 （考え込んで）…はて？？

全員 「はて？？」じゃないだろ！

大造 近くを通りかかったら教団の人がいたものだから…

藤原 教団？

大造 あれま！（大仰に驚いて）…あんたら教団の人じゃ？

全員 誰が！

小松 似てるけど違う！

泰造 違うのか…（とつても悲しそうな顔をする）

大塚 なにそんなに悲しそうな顔してんだよ！

大造 …じゃあ、あんたら何の人？

全員 劇団の人！

大造 劇団？…教団？（後退りながら絵かきのように指でアングルを作りのおぞき込む）…劇団？…教団？…はっはっは、区別がつかんのお！

全員 そうだね！ はっはっは（つい、笑ってしまう…）

小松 ……つて、和んでる時じゃない！ 何なんだ、おまえは？ ひとん家、勝手に上がり込んで！

藤原 僕んちでしょ！

咲智 もうてめーん家じゃねーだろ！

小松 だから、「ひとん家」。

大造 ……それって不法侵入か？

全員 （指を口に当て）…ここだけの話。

大造 （ひたいを、皆と寄せ合い）…実は…わしも。

全員 （肩たたき合つて） なかま、なかま。

茂木 ……こうやっていちいち和んでちゃ、話がちいとも前に進まないでしょ！ だから、おじいさん、こんな所でいったい何をやっているんですか？

大造 ……何をやるとるとな？ んー…（考え込んで）…捜し物じゃな。

全員 捜し物？

小松 ふつう、ひとん家で捜し物をするのを「物色」といって、それをする奴はな、

「どろぼう」っていうんだぞ！

大造 だろぼう？ はっはっは、泥棒とな！ わしは泥棒などではない！ 純粹に捜し

物を生業としておる人じゃ。これを使つてな！ シヤキーン！（自慢げに背中か

らダウジングロッドを取り出す）

おつ、それはダウジングロッド！

大塚 ダウジングロッド？

全員 なんですか、それは？

藤原 地面の下の水道管とかガス管とかを探するための道具なんだよ。

大塚 その通り。わしはその中でもプロ中のプロ、エキスパートというやつじゃ。

大造 ばかじゃねーの？ そんな針金で地中の水道管なんか見つけられるわけ…

三森 それが見つけられるんじやよ！

大・大 こうやってロッドを並行に保つて歩き回つてると、不思議なことに水道管のある

ところでロッドがすーっと開いていくのだあ！

大造 ……のだあ！

三森 なが「のだあ！」だ！

小松 ……ちよつと待て、三森。ときに、じじい、そのダウジングロッドとやら金属なら

なんでも探せるのか？

大造 金属でなくても探せるぞい！ 心に強く念ずればの…

小松 ひとつ頼みを聞いてくれぬか？ ……この別荘のスパアキー探して？

茂・咲 そうか、スパアキーか！

大造 おやすいご用じゃ！

藤原 そんなもの無いと思えますよ！

大塚 いんだよ、もし見つかったらラッキーだろ！

小松 その通り！ だめもとよお！

大造 (ロッドを並行に保って、あちこちうろろうろしていると、急にロッドが広がり始める) おおおお・・・

全員 開いていく、開いていくよ！ (大造のもとに駆け寄る)

三森 じじいが自分で広げてるんだろ！

大塚 じいさん、この引き出しの中かい？ (大造がこくりと頷くのを見て、急いで引き出しを開けると鍵が見つかる)

全員 あった！

三森以外の全員が喜び勇んで別荘の方へ行こうとする。

三森 どうせまた違う鍵じゃないのか？

大塚 何言ってるのよ、このあまのじゃく野郎が！ こんなストーリーの流れの時は、えてして見つかることになってんの！ そんなもつて、「やっぱ、ダウジングはスゲーよな」とか「一九九六年はダウジングね！」って結論が導き出されるわけよ。えつ？ そんなにお疑いなら、このでかいロッカーでも試してみようかあ・・・

と言つて大塚、ロッカーの鍵穴にその鍵を入れて回すと、「かちつ」という音が倉庫に鳴り響く！

全員 あつ！

固まつてしまった間抜け野郎どもを包み隠すように暗転。

五 寒くないのか、お前？

しんしんと降り積もる雪の中、木暮崎がシャベルで穴を掘っている。傍らに智久がいる。

木暮崎 本当にここなのか、穴掘るの？ 一面銀世界だぞ！

智久 室伏山の突端が剣ヶ峰の際にびつたりと重なるところ・・・ここだよ、間違いない。

木暮崎 自信ありげだね・・・

智久 ...でも剣さん、劇団の方はいいのか？ 心配して探し回ったりしない？

木暮崎 だって、奴等まだ来てねーんだもん。あんただって見たろ、あの白亜の豪邸にはいかつい鎧戸降りたままだったじゃねーか・・・それによ、遅刻、早退、無断欠席は俺の専売特許みたいなもんで、誰も騒ぐやつはいねーよ・・・

智久 ...ちよとさびしーものがあるね。

木暮崎 そう解釈されると困るな・・・どっちかってーと、俺の特権・・・そんな感じで理解してほしいものよ。何せ俺は看板だからさ・・・

智久 看板書いているの？

木暮崎 ばかだね、お前は・・・看板つたら、看板役者のことでしょ！ 客は劇団見に来るんじやなくて、おいらを見るのよお！

智久 これはこれは、かえすがえす失礼をば致しました。

木暮崎 分かればよろしい！・・・で質問なんだけどさ。

智久 なに？

木暮崎 ...俺、今、何掘ってるわけ？

智久 はっはっはっは・・・

木暮崎 (つられて笑う) はっはっはっは・・・

智久 ...鋭く切り込むね！

木暮崎 鋭いか？ こんな初歩的な質問だったらアヒルだってするぜ！

智久 残念でした。アヒルは言葉がしゃべれませーん。

木暮崎 ……どっかで聞いたな、その突っ込み。(……手酌かな?)

智久 (それ言うなら、デジャヴユだろ!)……だから、この下には教団に残る信者さん達すべてを救済できるものが埋まっているんだ。

木暮崎 だ・か・ら、それはなに?

智久 けいこさんも救える魔法みたいなもの。

木暮崎 ……ますます分かんねーな!

智久 いいじゃないの、掘り出してみりゃ分るんだから…

木暮崎 そうだな。はっはっは……でも、なんでやつら逃げ出さねんだろ?

智久 ……逃げ出せないんです。それに、逃げ出すところも……だから僕らが救わなきゃならないんだよ…

木暮崎 ……もうだいたい掘ったな。

智久 疲れた?

木暮崎 疲れたよ、そりゃ。じゃあ、ちよつとお願いできるのかの? (と、智久にシヤベルを手渡そうとする)

智久 ……了解。では歌で応援しよう!

木暮崎 応援じゃなく、交替だろ!

智久、意に解さず、ギターを取り出し歌い始める

……狭い箱に入れられ、鎖につながれて

おいらと同じ月を見て涙流すのか…

木暮崎 おつ、この曲は!

智久 知つてんの?

木暮崎も歌い出す。

……吠えろ、お前も 喉が裂けるほど

そしたら、今すぐ 連れ出す

吠えろ、お前も 悲しいほどに

野良犬もそんなに悪くない…(野良犬 by ARB)

木暮崎 ……今、けいこの顔が浮かんだぜ。おいらに助けを求めてやがる。……待ってろ、

今、助けに行つてやるぜ。(再び、猛然と掘り始める)……どうしたの? (ここで、

もつと、歌! 歌!

智久 扱いやすい奴…

木暮崎 何か言つたか?

智久、ギターをかき鳴らし、歌い始める。

がなりながら、猛然とスコップをふるう木暮崎。

照明、ゆつくりと落ちていき、智久へのサスとなる。

舞台の袖に大造が立っている。

六 智久くんからの手紙

智久 前略 おじいちゃん。お元気でしようか？ 突然の手紙でさぞ驚かれていますことと思います。このように手紙を出せるようになったのは、実は僕が教団を辞めたからに他なりません。いや、辞めたというより逃げ出したんです。

大造 ……智久、お前今どこにいるんじゃないや？

智久 教団に追われている可能性があるのですが、僕の居場所を書くことは出来ません。いわゆる、逃亡犯みたいなものですんで。

大造 逃亡犯って、お前…

智久 だから、もしかしたら、こんな僕のせいでも、おじいちゃんにも危険が及ぶ可能性があるんです。もし、おじいちゃんの周りで何か不穏なことが起こり始めたら、すぐ警察に通報してください。

大造 ……警察？

智久 いや、警察なんて当てにならないかもしれない…これは、警告です。教団は恐ろしく変貌しています。おじいちゃんの想像もつかないぐらいに。僕もそれに手を貸しました。嫌でした。

大造 智久、お前、一体何を…

智久 だって、僕がここに入ったのはこんなことをするためじゃない！ 僕はここにすべてがあると思っていました。僕の失った全てのもがあるような気がしていました。

大造 失ったもの？

智久 でも、それはここには無い。だから僕は、…だから僕は抜け出したんです。こんな危険まで冒して… それに、自分を守るため、こんなものまで持ち出してきたしまった…

大造 智久、何なんじゃ、それは？

智久 この小さなケースに入った、これは…いや、おじいちゃんに言ったって分かりっこないよね… それにとり立てて書くほどのものでもないし… 埋めることに

決めたんです、これ。地中深く誰も知らないところに… おじいちゃんは水道管や鉄屑を掘り返したり発見したりするのも得意だったけど、埋めるのもうまかったよね。ほら、僕が小学校を卒業するとき、記念にタイムカプセルを埋めたでしょ。二人だけの秘密の場所に…

大造 そうじゃった… 二十一世紀になったら掘り返すんじゃないの…

智久 あの時みたいに、地中深く…誰も知らないところに… じゃあ、体に気をつけて。また手紙書きます。

同じ空の下より、とりにそぎ。

智久

大造

智久…

明かり、元に戻る。

穴の中の木暮崎が智久の顔をじつと見ている。

木暮崎 ……何見てんだ、お前？

智久 (剣の方を振り向き) 山…

木暮崎 あだよ、日が傾いてきたんでさ…

智久 今日は、お開きにしますか？ 続きは明日のお昼ぐらいに…

木暮崎 ……明日の穴掘りは、お前な！

智久 (頷く)

木暮崎 それから、もうひとつ！ 別荘の前まで車に乗せて… 凍えて死にそー。

木暮崎・智久退場。大造は立って、遠くを見たまま…

そこに小松が入ってくる。当然マルちゃんホットヌードル食いながらだ。

七 また、マルちゃんですか？

小松 ……じいじ、お前ダウジングでスペアキー探してるんじゃないか？ ボケーと突っ立って何見てるんだ？

大造 (小松の方を振り向き) 山…

小松 やま？ ……まあ、いいか。あんたが見つけてくれたロッカーのキーのおかげで、こうして食事にありつけたわけだしな……しかし、あのでかいロッカーの中に保存食品がてんこ盛りだったとはな。

大造 まあ、拾う神あれば、捨てる神ありといったところじゃの。

小松 はっはっは…逆だろ、それ。

大造 ……ところで、お前何喰ってるんじゃない？

小松 これか？ これはブルーマウンテンで作ったマルちゃんホットヌードルゴールドだ。ちなみに藤原くんの製作だ。

大造 うまいのか？

小松 けっこういけるぞ、香ばしくて…

大造 ……

小松 そうだ！ じいじ。おまえも究極エスニックメニュー・ウィズ・ロシアンルーレットに参加しないか？

大造 きゆうきよくえすえすに…？

藤原 (舞台裏から) 小松さん、どうしたんですか？

小松 じいさんもやるみたいだから、こつち持って来てくれ！
藤原 はーい！

全員、カップ麺を乗せたテーブルとともに、わらわら集まってくる。

咲智 (手にくじを持ち) じゃ、三森からね…

小松 ちよつと待った、この俺の引いたくじも入れて……あつ、これ引いた奴スカな、究

極エスニックメニューは残念ながら食べれないということ…

三森 おお、やる気出てきた。(くじを引く) 1ばーん。

咲智 はい、これです。

三森 (差し出されたカップ麺をみて、ちと躊躇う) げつ、こいつはおれがつくったやつだ！

藤原 なんですか、それ？

三森 カレーヌードルをホットカルピスで…

茂木 げつ！

三森 (二口食べて) うーん、デリシヤス！ カレーヌードルのぴりつとした辛さにカルピスの酸味がまわりついて、まるでトムヤムクンみたい！

大塚 お前、涙目になってるぞ。

咲智 次はキャサリン。

大塚 (引いて) 4ばーん！

藤原 おつ、焼きそばタイプだ！

咲智 製作は？

茂木 僕です……とにかく蓋開けてみてくださいよ。

大塚 おお、麺の上にキャベツや紅生姜に混じりギンビスの「食べっこ動物」が！
麺にデコレートされたキャベツや紅生姜を草原に見立て、その上に野性動物達を配置してみました。題して「アフリカの発見」！ ……さつ、ソースをかけて召

茂木 上げられ。

大塚 こら、ソースはいつて！ ……あーあ、かけちゃった(一口頬ばり) ああ、まるで口の中がサバンナの春って感じ…

藤原 今度は僕だー！ 3ばーん！！

大塚 ふっじわらくん、らつきー！ わたしのだ！

藤原 げつ！ じゃなくて、うれしー！

大塚 キツネうどんを煮立てた…

藤原 (おそろおそろたずねる)……煮立てた？

大塚 フルーツみつまめで作ってみましたあー！（と蓋をはく）

藤原 こいつはまるで臓物の煮凝り！ 気絶するほどうれしー！

大塚 さあ、「お揚げ」を召し上がれ。

藤原 お揚げのほのかな甘味とシロップの殺人的な甘さが口の中でコングロマリットするー・・・ すっげー、美味！ ああつ、気が遠くなつていく・・・パラダイス・・・

大塚 と、藤原、ばつたり倒れる。死んだかもしれない。

小松 唐突に小松の声「はい、そこまで！」やおら立ち上がり・・・

藤原 （やおら立ち上がり・・・） どうですか、こんな感じの？

小松 まあ、君にしては着想いいよ・・・新鮮味感じないけどね・・・でも、おもしろい・・・

大塚 それに、みんなの具体的な発想も光るものがあつた。特にもつくん。「アフリカの発見」ーあれ、いいよ・・・うんうん。そうだ、腹減つてるだろ、じじいも食え。

三森 天ぷらそばでいいか？（と、カップ麺を渡す）

大造 （カップ麺を手にとるが、ちよつと不安そう・・・）

三森 何不安そうな顔してるんだよ。ふつうのカップ麺だつて・・・

大塚 そーそー、今の演技だつてば・・・あたしたちのだつてふつーのカップ麺だよ・・・

大造 （と、全員カップ麺を見せる）

大塚 演技？

大造 エチュードよ。

大塚 エチ？

大塚 演技の練習みたいなもの。

大造 （まだ、半分納得していないが、おそろおそろ、確かめながら麺をすすつていく）

大塚 ま、こゝ一番「笑い欲しい」つてときに、軽くストーリーに挿入するぐらいかな・・・ともあれ、忘れないうちに帳面に付けとこ・・・（結構真剣にノートにメモつてる）

大塚 ……ところで、帳面に付けるのはいいんだけどね。どうするのこれから？

小松 これから？ いいんじゃない、ここにいれば・・・倉庫とはいえ、食べ物はある、達磨ストーブもあつて、灯油もある。この安楽な生活を捨て、極寒の雪の平原に引き返そうとでも言うのか、君は？

大塚 そういうことじゃなくて・・・

茂木 キヤサリンさんの言いたいのは、これからの練習予定のことですよ？

大塚 そうそう、来たはいいけど練習どうするの？

小松 れんしゅう？？

藤原 だから今度の芝居の・・・

小松 しばい？ 俺たちは今、新たな生活に一步踏み出したんだ。ここには競争もストレスも芝居もない！ そんな世俗的なことは忘れる！

大塚 忘れられるか！

小松 （可愛く） だよねー・・・

大塚 だよーじゃないだろ！ どうすんの？

小松 とりあえず、これ。（と言つて、懐より紙を取り出し、みんなに渡す）みんなに回してくれ・・・

三森 おつ、新しい脚本か？（手にとり、愕然とする）・・・一行しか文字書いてないよ、これ？

小松 それアンケート用紙。

大塚 アンケート？

三森 （劇団員でもないのに、それを手にとり、読む）人間の子供は皆、最初は六本指で、生まれてすぐ大人達がそれを切り取ります・・・

大塚 じじい、お前は劇団員じゃないだろ！

大造 人間の子供は皆、最初は六本指で、生まれてすぐ大人達がそれを切り取ります・・・俺たちは物心ついたときから何かが欠落しているのに気付いている。普通、成長の過程でその曖昧な疑問は剥ぎ取られてしまうものだが、俺たちはそれに向かい合つていかねばならない。なぜなら、演劇そのものが失つた全てのものを取り返すという過程だからだ！

映智 何言ってんだか、分からんぞ！

小松 俺も……とにかく、それをキーワードとして頭に浮かんだいろいろなことをその用紙にびっしりと書くこと！ それをもとにして今回の芝居をこの場で構築していく！

茂木 さすが、小松さん。手を変え品を変え、いろんなことやってきましたね……

小松 お褒めにあずかり、光栄です。

全員 けなしてるんだろっ！

小松 ……とにかく、それになんか書くこと！

大造 (じつと、紙を見つめていたが)……小松くん。これ、この言葉……君が作ったのかの？

小松 何かで読んだ……

大造 ……智久もこれと同じことを言っとった。

小松 ともひさ？

大造 わしの孫じゃよ……息子夫婦の都合でな、高校出るまでずっとわしが育てたんじゃ。小さいころから、頭の良く回る利発な子で……東京の大学出たあと大学院まで行つての、何やら細菌だかウイルスだかの研究をしとったんじゃ……あの子が……

照明、暗くなり、大造にサス。舞台袖に智久が現れる。

大造 ……どうしても、行つてしまふのか？

智久 ああ。

大造 わしはお前がやろうとしていることを止めようと思ったことは一度もない。じやがな……

智久 おじいちゃん。人間の子供は皆、最初は六本指だって知ってる？

大造 ……？

智久 僕だって、おじいちゃんだって六本指だったんだよ。

大造 ……五本指じゃないか、わしも、お前も……

智久 それは生まれてすぐ大人達がそれを切り取ったからだよ……僕はそれを見つけるんだ……奪われたものを取り返すんだ。

大造 それがそこにあるのか？

智久 ある。そこには本当の真実がある。感じたんだ……いいかい、おじいちゃん。僕らが五本指なのは社会のまやかしによるものなんだよ。所詮この世なんて、宇宙の意識から見れば幻に過ぎないんだ……(去る)

大造 智久、待つてくれ！ お前は小さい頃から、いい子じゃった……じゃから……わしは、あの時なぜ、智久を止められなかったんじゃ。わしは……

照明もとに戻る。大造は遠い目をして、微動だにしない。

小松 誰か、この遠い目をした老人を現世に戻してくれないか？

大造 (大造の目の前で手を振り)……じいさん、どうしたの？

三森 ……わし、どうしたんじゃ？

大造 どうしたんじゃ……じゃねーだろ。孫の自慢話始めたと思つたら……急に遠くへいつちまつてよ……

大造 これはすまなんだ。

小松 ……それで、大学院まで進んだ智久くんは、今や私立女子大の専任講師になりウハウハな毎日を送っているわけか？

藤原 大学、途中で放校になった小松さんとはえらい違いですね……

小松 ぶんすか！ ぶん！ ぶん！

映智 怒つてやんの！

小松 そりゃ、怒るわい。

大造 ……実は、智久は大学院飛び出してしまつての……

小松 そりゃ、豪気だね！

茂木 小松さん！(たしなめる)

てな具合で、暗転。

大造 わしの捜し物というのは……その子なんじやよ……

小松 えっ？

大造 わしは、その子を探しておるのじゃ……

茂木 この雪の中を？

咲智 そのダウジングロッドで？

全員 ばかなの、この人？

三森 お前、脳みそに「す」がはいつてんじゃねーのか？

大造 そうかの？

全員 そうだよ！

大造 しかし、このダウジングロッドは、なんでも探せるんじや。心に強く念じさせずれば……

小松 おい、もつくん。このかわいそうなじいいのバッグ取ってくれないか？ それに住所かなんか書いてねえか？ どうせ脳軟化症で息子さんも困っているだろ。三森、こいつを自宅まで送ってあげなさい。

茂木 (大造のリュックサックを開けようとする)……これですね、小松さん。

大造 やめる！ (電光石火の早業でリュックサックを取り戻し、胸に抱く)だめじや、これは！

小松 なんなんだよ、じいい。……まあいい、今夜はここに居ろ。

大造 ほんとか……こりやありがたい。

咲智 (悲鳴を上げる)小松！ キヤサリンが！

小松 どうした？

咲智 バリバリ書いてる……

小松 キヤサリン、おまえ……

大塚 (アンケート用紙にバリバリ書きながら) ちよつと思ふことがあつてね……

小松 キヤサリン、おまえ……うちの脚本家にならんか？

大塚 (小松の鼻に左ストレート！)

小松 (鼻を押さえて)……すびばせん。

八 木暮崎の憂鬱

明転。舞台の上に木暮崎が一人。

木暮崎

・・・分かつてるさ、こいつは二人だけの秘密さ。だれにも言いはしない。おいらの口は奈良の大仏より重いぜ。それにおいらは野良犬だからな・・・じゃあな！
せいやあ！（と、飛びすさつて）てな具合に、智久くんの軽自動車から降りたのはいいんだけど・・・やっぱりみんな来てないじゃん。藤原くんの白亜の豪邸は鎧戸降ろしてひっそりと寝静まったまま・・・場所間違えたのかな？ いや、そんなはずは・・・どう見ても去年来た別荘だよな。しかし、夏とは違って冬は何か寂しく感じちゃうよね・・・この雪のせいで。（寂しくなつて）小松うー！ 劇団のみんなあー！ どこにいるんだ！（路上に走り出て）智久くん！ 俺、何だかマツキンレー独りぼっちで感じ・・・雪はどっかんどっかん降ってくるし、日は暮れてくるし、寒いし、腹は減るし・・・（ふと、胸元を探り、何かを発見する）あつ、これはこの前、五反田のランパブでもらったマツチだ！（シユツと擦つて）あつ、温かい暖炉が見える・・・あつ、消えた。（再び擦つて）あつ、今度は「七面鳥の丸焼きプロバンス風味茶ソー스あえ（なんじゃそれ？）」が・・・消えた。（二度擦つて）おばあちゃん、天国へ行ったはずのおばあちゃんだ！・・・「剣や、こつちへおいで・・・」おばあちゃん！」ってマツチ売りの少女こつちしてたら、ほんとに天に召されちゃうぞ、俺・・・こんな所で死ぬわけにやいかねえんだよ、剣さんは・・・何せ俺は野良犬さ！ 囚われの「けいこ」を救いに行く野良犬さ！・・・吠えろ、お前も、喉が裂けるほど・・・（と、一節歌い）・・・でも、今、俺・・・野良犬より、あつたかい部屋の中で、ペチグリー・チャム食べてる飼犬になりたい・・・

遠くを見つめる木暮崎に雪がしんしんと降り積む・・・

どこからか「太郎を眠らせ、屋根に雪降り積む・・・ 次郎を眠らせ、屋根に雪

降り積む・・・」と、歌う森山良子（？）の歌声が響いている——などというのは、どうでもいいので、速やかに暗転。

九 劇中劇の招かれざる客

ゆつくりと明るくなつていく一本のサス。
ぼつんと立っている、キャサリン大塚。

大塚 ……やっぱり来ちゃったよ。こんな所まで……どうしようもないことは分かっている。あたしには、何もできないつてことも……でも……劇団で本栖湖で合宿するつて話が出たとき、真つ先に頭の中に現れたのがあんただった。振り払おうとしても、振り払えなかった。けいこ……あんた、この中にいるのかい？ この大きなプレハブ小屋の中に……

警察官が現れる。きつと警備の人なんだろう……でも、きつい栃木訛りだ。あれ？ よく見ると三森だ！

三森 あんた、信者の人？

大塚 (我に返つて)……いえ。

三森 じゃあ、なんの人？

大塚 劇団の人。

三森 劇団の人？……区別つかないよね。

大塚 ……

私ね、ここの警備まかされてんだけどね。ほら、年末年始、大変だから……栃木県警から、応援でね、来てんのよ……ところで、あんたなんで、こんなところに？

大塚 ……昔、一緒に芝居やつたのが、まだこの中にいるらしくて。けいこつて名前なんだけど……

三森 だめだよ。一般の人には入れてもらえないよ。日も暮れてきたし、早く帰つた方がいいと思うんだけど……

大塚 分かっている。もう少ししたら帰るよ……

三森 だからつて、あんたね、こんなプレハブ小屋見てもおもしろくないでしょ。あつ、そうだ！ おじさんね、手品得意なのね……(一本の紐を取り出し)ここに取っただいた紐。これをちよつきんつて切つてまた繋げるつて手品なんだけど……

大塚 マギー司郎か？

三森 東京の人は、北関東訛りのおじさんはみんな手品得意だと思つてるだろうけど、それつてあなたが間違いないよね……この紐をね、こんな風に折り曲げて、ここのところをちよつきんつて切つちゃうのね、このとき、引つ張っちゃうたら、タネばれちゃうから……

三森の手品が始まる中、「Jennifer (by Goblin)」が静かに流れ込んでくる……
照明は再び、大塚へのサスのみとなる。

大塚

……けいこ、憶えてる？ ワンナイトシンデレラでやったよね、マギー司郎。北関東訛り憶えてさ……飛び出すステレオマギー司郎つてやつ。二人つきりで、夜が明けるまで練習したよね。あんたは、ほんと物覚えが悪いから、大変だったよ。「だめだつて、けいこ！ ここのタイミングの取り方。ちゃんと合わせないと……もう一度行くよ。……このハンカチからね、鳩が出るんだけどね……この鳩ゴムなんだよね、ゴム……つて、だから、ここのところを合わせてやるんでしょ！」……私が怒ると、あんたは目をまん丸にして、じつと私を見つめる……そして何度も頷いて、あたしが言った他愛のないことにまで頷いて……そんな風にされたら怒れなくなつちゃうじゃないか……だから、いつも笑っちゃう、怒りながらも笑っちゃう。すると、けいこも笑う、二人だけで、真夜中に腹抱えて笑っちゃう……そうだ、東京コミックショーもやったよね……あたし達は、どうせストーリーに關係ないワンナイトシンデレラのお笑い担当「はるこ&けいこ」だったからさ……他の人たちは、きれいな衣装着て、きれいな化粧して……でも私たち二人は、いつも珍妙な服に滑稽なメイク……あんたがボケで、あたしがツッコミ……うま

くやつてた、うまくやつてたじゃんか。…ねえ、けいこ。どうして、いつちまったんだい？

その時、舞台袖から茂木の声「キャサリンさーん」
駆け込んでくる茂木と藤原。

茂木 キヤサリンさん、こんなところいたんですか？ 急にいなくなるから、藤原くんと

探しに来たんですよ…

探しましたよ。でも見つかって良かった…

藤原 (遠くを見る、大塚に気付き)…なに見てるんですか？

茂木 あれ…(前方を指さす)

大塚 あれつて…教団の施設じゃないですか？

三森 (割って入って)きみたち、誰なの？

藤原 だから…

三森 このおねいちゃんのお友達なの…

茂木 ええ。

三森 だったらね、おじさんのね、手品見ようか？

藤原 手品見ると…

藤・茂 誰、この人？

大塚 マギー司郎…

藤・茂 マギー司郎？

三森 そんなわけだね、今度の手品は…(懐からL字型の針金を取り出し)このね、

針金使った手品ね…

藤・茂 それは、ダウジングロッド！

三森 お客さんの方がよく分かっているよね…(五百円玉を取り出し)この五百円玉

を誰が握っているか、この針金で当てちゃうつてやつ…

大塚 …おっさん。そのダウジングロッドで五百円玉じゃなく、この建物の中にけいこ

がいるか調べて…

茂木 けいこつて！

藤原 あのワナシンやめた…

藤・茂 でぶちん？

茂木 ここにいるんですか？

大塚 けいこはでぶちんなんかじゃないよ…

三森 …じゃあ、今度の手品は施設の中のけいこさんの位置をびたりと当てちゃうつ

て言うつていうの…こんな風にね、針金もつてね、こうやつてね…つて、普通

出来ないよね？

大塚 出来るよ…

藤・茂 キヤサリンさん！

舞台袖に大造が浮かび上がる。

大造 …そうじゃ、キャサリン。そいつは何でも探し出せるんじゃない。心に強く念ずれ

ばの…

大塚 そうだよね、じいさん。

藤・茂 じいさん？ (周りをきよろきよろ見る)

大造 どうじゃ、キャサリン。見えてきたじゃろ。

舞台後方に長い黒髪のサテンの服を着た女が現れる。後ろ向きでヨーガのアサ

ーナの一種の動き(テレビでよく見るだろ?)をゆっくりと行っている。

大塚 いる…けいこがいる。…見えるよ。

大造 …話しかけてごらん。

大塚 けいこ！…だめだ、気付かないよ。

大造 もう一度…

大塚

けいこ！

後方の女の動きがびたりと止まる。

大造

どうやら、思いが通じたようじゃの。

大塚

……けいこ、わたしよ、はるこ。分かる？ ねえ、けいこ…… あんたがワナシン辞めて田舎帰っちゃった一週間後、結局私も辞めたんだ。……私一人じゃいるとこなくてさ…… そのこと、ずっとあんたに言おうと思ってたんだけど、言い出せなかった…… そのうちに、あんたがここに入ったことを聞いた。由莉架の結婚式するとき、あたしもよばれたんだ…… あんた知らないだろうけど、由莉架、結婚したんだ。ワナシンの中で初だよ。…… あんたが、入信したついでに、みんなげらげら笑ってた。ワナシンの連中、みんな笑ってた。あたしもつられて笑った…… ちつとも、笑いたくなくなつたのに…… 大仰に驚いた振りをして、そして笑った…… けいこ、憶えてる？ あの「底抜け！ ミッドナイト・ロマンス」で漫才コンビの役やった時のあの台詞、「ツツコミに愛想つかされたボケと、ボケに逃げられたツツコミ、どっちが悲しいか？」…… この答えは？ あたし達はあの芝居で答えを出せなかったわよね…… だから、けいこ、もう一度…… ツツコミに愛想つかされたボケと、ボケに逃げられたツツコミ、どっちが悲しいか？

けいこの肩が揺れる。ためらいがちに振り返ろうとする刹那。

舞台後方より雷鳴にも似た声が鳴り響く……

「その答えは……どっちも悲しいだ！」 誰だ？ 皆、周りを見る。

舞台奥からその声の主が飛び出して来る。こっ、木暮崎剣だあ！

木暮崎

……キャサリン、よくやってくれた。おいらのけいこさんをここまで連れてきてくれるとは…… あんたの役目はここで終わりだ。これからはおいらの役回りだぜ。なぜなら、俺がけいこさんを救うヒーローってわけだからよ！ くーっ、頭の中

で「野良犬」が鳴り響いてやがるぜ！ けいこ！ いや、けいこさん、あんたの悲鳴、確かにこの木暮崎剣が聞いたぜ。……しかし、あんたがああワナシンのでぶちなんだとはな……滑稽メイクにころつと騙されてたぜ。とんだダイヤモンドの原石さ、あんたは！ さあ、吠えろ！ おまえも、喉が裂けるほど……そして今すぐ、連れ出すぜ！

木暮崎、わけの分からん世迷い言を口走りながら、暑苦しくけいこに近づいていく。そして肩を抱き……「野良犬もそんなに悪くないぜ……」と言って、抱き締める。と、けいこ、剣から飛びすきつて…… あれ？ こいつ小笠咲智だ！

咲智 やめろ！ 暑苦しい！

木暮崎 げげっ、お前は咲智？ なんでー？

全員 「なんでー？」じゃないよ！

木暮崎 あれれ！？

小松 (舞台袖から出てきて) ばか！ 何なんだよ、おまえは？ 急に出てきて……せっかくのエチュードが台無しじゃねーか？

木暮崎 エチュード？

咲智 そうだよ。キャサリンの書いた原案をもとに芝居を作ってたんだよ。

三森 いい感じで進んだのになあ！

木暮崎 俺でつきり、けいこさんがいるんだとばかり？

大塚 けいこさん？

木暮崎 教団の人……

大塚 知り合い？

木暮崎 ……ちこつと。

大塚 それって……

小松 (大塚を制して) まったく、これだから舞台と現実の区別のつかない人は困るよね……

木暮崎 俺は困つてない！ しかしな、そんな困らぬ剣さんも、今回はちつと困り果てたぞ。なぜなら、俺は君達と違つて舞台と現実の区別はつかぬとも、別荘と倉庫

藤原 剣さん！

の区別はつくからだ！ ……てめーら、何でこんなところに隠れてた！

茂木 別に、隠れてたわけじゃないんです。

ぼけたおす老人と木暮崎。
舞台は平手打ちのように暗転。

木暮崎 じゃあ、なんなんだ！

茂木 実は……(小松の方を見る…… 小松、ちよつと困つてる。しょうがないから、事実を剣にそつと耳打ち) ……(こによ、こによ……

木暮崎 (それを聞き、小松の前に歩み出て、殴る) ばか！

小松 ……そんなにみんなしないでいじめなくてもいいじゃん！

木暮崎 しょうがねえやつらだね、全く。

大造 これこれ、そんな寄つてたかつていじめるもんじゃないよ。

小松 じいさん、あんただけだ俺の味方は……

大造 ところで、どうじゃった？ わしの演技……

小松 友情出演ありがとうございました。

大造 けつこう、やれるもんじやの、はつはつは……

木暮崎 誰だ、こいつ？

全員 大造じいさん！

大造 大造じいさんです。

咲智 迷い込んできたんだよ。

木暮崎 迷い込んでつて……おい、じいさん帰んなくつていいのかよ？

大造 帰る？

木暮崎 だから、家。心配してるだろう！

大造 家……はて、なんのことかの？

木暮崎 おい、ぼけてんのかこいつ？

藤原 あつ、そうだ！ 剣さん。カマロ大丈夫ですよ。それにしても、よくこの雪の中を……

木暮崎 はつ？ カマロ？ なんのことかの？

十次の日、木暮崎は……

舞台の上に、キヤサリン大塚。柔軟運動をしている。
そこに登場してくる小松。

小松 おはよう。

大塚 これは早いお目覚めで……もうとつくに昼過ぎてるぜ！

小松 明け方まで、ちよつと書いててな……

大塚 背中？

小松 そうそう、股ぐらとかプロットとか……

大塚 で、出来た？

小松 大枠ではな……

大塚 昨日のエチュードは役立った？

小松 多少は……あれをもう一段階違つた視点から描こうと思つてさ。……外側でも内側でもない、その中間の……だから、最も遠いところから、あの場所を見るよ
うな……とにかく、昨日のお前の視点は近すぎる。
近すぎる？

小松 ……昨日のけいこの話……あれ本当だろ？

大塚 そんなわきゃねーだろ！ 事実無根、脚色バシバシ、この話はフィクションであり、
登場する団体はすべて架空のものですつてな具合よ！

小松 ……嘘なら、もつとちよつとつけ。

大塚 ……うまく、嘘つけるんだつたら、役者じゃなく詐欺師になつてるところだ
よ……

小松 そうだな……とりあえずこれ。(と、紙の束を渡す) ニュープロット。

大塚 一晩で書いたにしては、結構な量だね。

小松 人数分プリントアウトするのに、時間かかったよ……とりあえず、このプロット
で、あと二、三日はここで踏ん張つてみようと思つて……おぼろげだった構想

が、ここに来てやつと現実味を持つてきたような気がするんだ。

大塚 一からの出発……大変だね、毎度毎度……

小松 ……他のやつは、もう向こうの方で読んでいる。お前も読み終わつたらこつち来て
くれ。(退場しようとするが……) あつ、そうだ。お前、剣しらねーか？

大塚 (ぼらばら読みながら) 剣なら、昼前にさうそうと出ていったぞ、「野良犬」口ず
さみながら……

小松 出てつた？

大塚 まだ、帰つて来てないのかい？ あたしやてつきり、走りに行つたんだとばつか
り……よし、読み終わった！

小松 早いね……

大塚 さあ、始めようぜ！

大塚、小松を押すようにして退場。

入れ替わりに、木暮崎と智久。雪の中を歩いている。

木暮崎 だからさ……そのじいさんつていうのが、変な奴なんだ……こんな針金みてえな
の持つて……なんて言つたけな？

智久 ダウジングロッド……

木暮崎 そう、それぞれ。よく知ってるね……だから、こんだけ掘つても見つからないん
だから、このじいさん呼んできて、その何とかロッドだよ……

智久 見つかるわけないだろ、そんなもんで……

木暮崎 だよねー、そうだよねー……

智久 とにかく掘つてる位置に間違いはないんだ。あとちよつと……あとちよつとで見つ
かるはずだよ。

木暮崎 ……ということ、明日にでもそのけいこさんを救うと言われている魔法を、こ
の手にできるわけね？ わくわくだね？

智久 わくわくだね……

木暮崎 でもさ、最近思うんだけど…

智久 なに？

木暮崎 教団に入っちゃった奴等のこと…大した理由もなく入っちゃったのもたくさんいるんじゃないのかな… 実のことを言うと、俺が劇団入ったのも大した理由なんか無いんだよ…あれは、俺が田舎から出てきて大学入学した時のことなんだけど…

智久 剣さん、大学出なの？

木暮崎 入ったのは憶えてるけど、出たかどうかは定かでない。…とにかくその時に、いい匂いのするきれいな姉ちゃんが俺の前に現れて、こう言ったんだ…「劇団に入らない？」 まあ、生まれつきのヒーローだからしょうがないんだけど、いい、入っちゃったんだよね… この時いい匂いのする姉ちゃんが、「教団に入らない？」って言ったとしたら…俺、つい入っちゃったと思うよ、同じように…

智久 そういふもんな？

木暮崎 そういふもんだよ。いい匂いのするきれいな姉ちゃんに勝てる奴はそうそういねーよ。

智久 そういふもんな？

木暮崎 ともあれ、「劇団」に入ろうが、「教団」に入ろうが、その時点で人生にうっちゃりかけたのにはかわりないんだけどね…はっはっは…

智久 はっはっは…

木暮崎 …って、智久くん。ほんとにこちでいいんだっけ、車のあるの？

智久 いいんだよ。

木暮崎 なんか、夕闇と雪の相乗効果で方向感覚が麻痺しちゃうよな…

智久 ほらそこに道がある。

木暮崎 道？ 野っ原と区別がつかないぞ！

智久 ほら、車…

木暮崎 車？ どこに…

智久 それぞれ。雪に埋まつてんの…

木暮崎 ほんとだ。これじゃ、ただの雪の山じゃんか！ すげーな、俺がさつき車の中で

智久 仮眠してたときはこんなじゃなかったぜ！

木暮崎 とにかく、すごい雪ですから… さあ、ドアのところ掘って…(雪を掻き分ける二人) そうだ、剣さん。鍵返して。さつき一人で休憩してたとき、持ってたままでしょ…

木暮崎 ああ、そうだった、すまんすまん…(と、ポケットというポケットを探すが、見つからない) ありや、どうしたっけな？

智久 まさか失くしたんじゃない！ (と、その時ドアが開く) がちゃ！ あつ、ドア開いた…(のぞき込んで)…なんだ剣さん、鍵穴に差したままじゃん、うっかり者だな…

木暮崎 そうそう、剣さん、うっかりさんなの…(と、ドアを開け、助手席に滑り込む)

智久 エンジンかけて、少し暖まったら、周りの雪を片付けましょう…エンジンかけて…エンジン…(動き止まる)

木暮崎 どうしたの？

智久 キーがパワーオンのままになってる…

木暮崎 えっ？ はっはっは…剣さんうっかりさんだから…さつき、休んでたとき、ガソリンもつたいないと思って、エンジン切ったままヒーター付けてシャ乱Qなんか聞いたりして…シャ乱Qは切ったんだけど、鍵を抜くの忘れ…

智久 エンジンかけなきゃ、ヒーターにならないよ…

木暮崎 やっぱし、どうりで寒いと思った…でもこんなもんな、なんて…

智久 スモールランプも点いたままになってるし…

木暮崎 いや、ワイパーでも動かそうとして、いじってたときかなーなんて…

智久 バッテリーが…

木暮崎 …上がっちゃったの？

智久 (がつくししている)

夜の帳とともに照明もゆつくりと暗くなってくる……

十一 室伏山と剣ヶ峰が重なるところ

木暮崎 智久くん。そんながつくししないで……元気だそう！（しようがないので頓狂

になつて）ほら、車が完全に雪に埋まつて、まるでかまくらの中にいるみたい……ほら、なんか秋田に観光に来てるつて感じ……こら、いい子にしないと
なまはげがくるぞ、なんて言つたりなんかしちゃつたりして……わーいわーい、
かまくらかまくら……火鉢でもちを焼く真似……手で持つて、「うわっちち……」
なんて……のりを巻いたらあべかわよ（あべかわは、きなごだろ！）、なんて……

智久 五分間だけ静かにしてもらえる？（ちよつと怖いぞ！）
木暮崎（素直に）……はい！

夜の闇が完全に二人を包み隠す。

明転する。大造が窓の外を見ている。舞台袖から、茂木が現れて……

茂木 ……すごい雪ですわね？

大造 そうじゃの……もつくん、どうしたんじゃ、練習は？

茂木 今、夕飯タイムなんですよ……だから、小松さんが大造さん呼んで……
て……

大造 飯か……

茂木 どうせカップ麺ですわ……

大造 ……もつくん、今、わし、孫のことを思い出しとつたんじゃ……
茂木 行方不明のお孫さんですか？ そのことなんですけど、やっぱり警察に頼ん
で……

大造 警察は何もしてくれん……じゃから、わしが……もつくん、わしな、その孫と

茂木 一緒に昔、タイムカプセルを埋めたことがあるんじゃ
たいむかぶせる？

大造 二十一世紀になったら一緒に掘り返す約束での……あれは孫が小学校卒業の
ときじゃつた、ずいぶんと前のことじゃが、つい昨日のことに思い出せ
る……

茂木を置いてきぼりにして、広がっていく大造ワールド。

智久が現れる。

大造 じゃから、智久。埋める場所は木や川やそんなものを目印にしちやいけないん

じゃ。それは空の雲とおんなじで、すぐ姿を変えてしまう。

智久 じゃあ、何を目印にするの？

大造 山じゃ！

智久 山？

大造 そうじゃ、山は動かんからの… いいか、智久、こっちへ来てみる。その小高い丘のてっぺんが、遠くのあの大きな山の頂とちょうど重なつてるじゃろ…

智久 ほんとだ！ ぴったり重なつてる。

大造 ここじゃよ、タイムカプセルを埋めるのは…山の寿命はわしらの人生に比べようも無いほど長い。だから、この山に守られたこの場所に…

智久 永遠のこの場所に…

大造 わしらだけが知るこの場所に…

智久 深く…出来るだけ深く…(智久消える)

茂木 ……おじいさん、だいじょうぶですか？

大造 ああ、大丈夫だとも…(窓に視線を走らせ)…今朝も、この窓から室伏山がよく見えた。

茂木 ええ、たった一瞬の晴れ間だったけど、富士山がよく見えましてね。

大造 そうじゃ、深々と雪をかぶった剣ヶ峰がこれ見よがしに…そうじゃ！

茂木 ……どうしたんですか、大造じいさん

大造 分つたぞ、智久！

茂木 智久？ 僕はもつくんですよ…

大造 あそこじゃ！ 室伏山の頂が剣ヶ峰の際にびつたりと重なるあの場所。シラカバに囲まれた山に守られた、あの永遠の場所に…

大造、やおらシャベルを持ち上げ、外に走り出そうとする。

茂木 大造さん！ どこ行こうっていうんですか？ こんな吹雪の中！（しかし、その制止を振り切り、大造は極寒の夕闇、駆け出して行ってしまう）…大造さん！ 待つてください！…小松さん！ 大造じいさんが！

茂木、とまどいながら退場。

暗転。風の音。

小松の声、交差する懐中電灯、そしてゆつくりと明転。

小松 ……もつくん、なんでじいさんがこんな日暮れに？

茂木 分かりません。突然、「分かった！」って叫んで…

三森 なんちゅう吹雪なんだ！

藤原 もう暗くなつてきてる。このままじゃ、僕らも遭難しちゃいますよ。

大塚 だからつて、引き返すわけにやいかないだろ！

咲智 じいさん！ 大造じいさん！（叫ぶ）

風の音。

大造、ダウジングをしながら舞台袖から出てくる。深い雪の中を掻き分けるように…

大造 ……絶対そこじゃ！ 室伏山の頂が剣ヶ峰の際にびつたりと重なるどころ。そこ

だったんじゃ… 智久、待つとれ、おじいちゃん、おじいちゃん、必ず、このダウジングロッドで見つけ出してみせるぞ…

風の音。交差する懐中電灯。劇団員たちの声。

全員 じいさん！ 大造じいさん！

三森 もう真つ暗だぞ、小松！

藤原 それに、あんまり雪がすごいから、じいさんの足跡が消えていくよ…

咲智 これじゃ、見失っちゃうよ…

小松 もつくん、やつは何か言つてなかったか？

茂木 ……たしか、「室伏山が剣ヶ峰にびつたりと重なるあの場所」つて…

小松 それはなんのクイズだ？

大塚 ぼけてる場合じゃないだろ！ とにかく、急いで追うんだよ！

風の音。ダウジングロッドを構えて吹雪の中を歩く大造。

大造 智久、じいちゃん、なんで気付かなかったんだろう、この場所を……ここは、わ

しがこの村に来たとき探したところじゃったのに……あの時、ダウジングロッドは動きもなかったのに……今は、ほれ、びくびく動きよるぞ！ 智久、ここなんじゃろ？ お前が埋めたのはここなんじゃろ？ 分かる、じいちゃんには分かる……ここじゃ、ほれ、だんだん開いていく……開いていくじゃろ！（と、大造、智久の掘った穴の中に転げ落ちる）穴じゃ、こんなところに穴じゃ……はっはっは、智久お前が掘ったのかい？ そうなんじゃろ？ しかし、まだ……掘り当ててはいないようじゃの。ダウジングロッドが「ここじゃ、ここじゃ」と騒ぎまくっておるからの……

無言で穴を掘り出す、大造。

風の音。交差する懐中電灯。藤原の悲鳴。

三森 ……ふっ、藤原！

小松 どうした三森？

三森 藤原が消えた！

全員 藤原が消えた？ どこに？

三森 雪の中……

小松 とにかく探せ！

全員、雪を掻き分けて藤原を探す。しかし、どこにも見あたらない。「死」の一文が全員の頭をよぎった、その刹那！ 藤原がはるか前方の舞台袖より「ぶはっ」という感じで、顔を出す。

全員 ……藤原！

藤原 ……小松さん、歩くより雪の中を泳いだ方が速いですよ……こんな感じに平泳ぎの要領で……

全員、きよんとしているが、小松が口を開く。

小松 お前、コロボツクルか？

咲智 コロボツクルはそんなことしません！

大塚 お前から二人こっち来い！

小・藤 (気を付けて)はい。

大塚 ばっしっ！ びっしっ！（と、バカ二人にパンチをくれて）真剣に探せ！

小・藤 (鼻を押さえて)はい……

風の音。

大造、震える手で穴の底から何かを拾い上げる。

大造 (微笑んで)……智久……じいちゃん……見付けたぞ……智久……

ゆっくりと前のめりに倒れ込んでいく、大造。

風の音。叩きつける吹雪。

雪が大造の上にゆっくりと降り積もっていく……

遠くで大塚の声。

大塚 みて、あそこ！ あの吹き溜まり……

三森 ありや、じいじやねーか？

小松 そうだ！ 急げ！！

全員、大造に駆け寄る。もつくんが抱き起こして……

……大丈夫ですか！

大造 (うつろな目でもつくんを見て……ほほえむ)

茂木 なんてこんな吹雪の中に、急に飛び出したりなんか……

大造 (ゆつくりと合わせた両手を茂木に近づけ)……智久。見付けたよ……

茂木 ……

風の音。叩きつける吹雪。

そして、暗転。

十二 そこにはただ、ダウジングロッドがあるだけ……

風の音。

暗やみに木暮崎の声、「智久くん」

明転すると、シヤベルを持った智久が立っている。深い雪の中を走り込んでくる小暮崎。

木暮崎 バッテリー上げちゃったの怒ってるの？ 実は免許とったのつい最近でね……ほんとに初心者なの剣さんったら……

智久 ……しょうがない、こうなったら掘りましょう。

木暮崎 掘るつて、もう真つ暗だよ。つるべ落ととしてやつ……それつて、秋の夕暮れの形容じゃ……。それに雪だつてどつかんどつかん降つてきてるし……

智久 もう少しなんだ！ 掘つて、僕は今夜中に村の方へ抜ける。

木暮崎 なに言ってるんだよ……そうだ！ うちの劇団の別荘へ行こう。別荘についてもほんとはその裏手の倉庫なんだけどさ。でも達磨ストープはあるし、食いも

んだつてある、「ギンビスの食べつ動物」とか……

智久 もうすぐのはずなんだ。あとちよつと掘れば……早くしないと、僕の……胸騒ぎがするんだよ。

木暮崎 智久くん、きみは今、バッテリーと一緒に頭にも血が上がってしまった。ここは落ち着いて……

智久 (立ち尽くして) あつ、穴が……

木暮崎 (立ち尽くして) ……掘り返されてる。

智久 (穴に駆け寄り) どういうことなんだ！ これは一体！ (木暮崎に) てめえ、誰かに言いやがったな！

木暮崎 どうしたの、血相変えちゃったりなんかしちゃつて……

智久 (木暮崎の首根っこを掴み) てめえが言わなきゃ、どうしてこんなことになるんだよ！ (穴の中の雪を慌ただしく掻き分けて) 僕の……僕の……掘り返され

てるじゃねーか？

木暮崎 智久くん。俺は誰にも言っていないよ。誓っても……

智久 (慌ただしく動いていた手が止まる。ゆつくりと持ち上げると、ダウジンググロッドが握られている。) ……これは！

木暮崎 それは、ダウジンググロッド！ まさか、あのじじいのじゃ！

智久 じじい？

木暮崎 だから、劇団に迷い込んできた変なじじいが……(と、智久に首根っこを締めつけられちゃう)

智久 そのじじいの名前は？

木暮崎 (一生懸命思い出そうとしている) ……なんだっけ？ 確かむくはとじゅう(漢字でどう書くんだったっけ？—木暮崎、談)の昔話の…… 何とかと雁。

智久 大造……

木暮崎 よく分かったね。さすが智久くん……

智久 (木暮崎の首から手を放し、笑って) ……おじいちゃん、なんでだ？ どうしてこんなところにいる？

木暮崎 おじいちゃん？

智久 ……どうして？

木暮崎 智久くん……おじいちゃんってまさか？ (智久の肩に優しく手を掛けようとする)

智久 ……どうして邪魔をする！

と、智久、振り向きざまに木暮崎を殴打する。倒れる木暮崎。駆け出す智久。

舞台の上には木暮崎が一人。ゆつくりと立ち上がる。

木暮崎 へっ……(力なく笑いーちよつと待て、またこいつなんか憑いてるぞ！) 智久くん、振り向きざまのフック、いいパンチだったぜ。だが、その程度じゃ、東洋止ま

りよ……世界のパンチはこうゆーパンチよ！って、どこ行ったの？ ……けっこー効

いたよ、今の。(ふらふらして) 剣さん気を失いそう……(倒れかけるが、起き上がり) おっと！ こんなところで伸びちまったら凍死しちゃうぜ！って言いながらも……やっぱり気は遠くなつていく……

倒れ込む木暮崎。死んじやうのか、木暮崎？

そんなことはお構い無しに、舞台は暗転する。

十三 炭疽菌、その学名は *Bacillus anthracis*

倉庫の中、石油ストーブがあかあかと燃えている。
大塚が大造を抱き抱えて座っている。劇団員数人がその周りを取り囲んでいる。
やがて、大造がゆつくりと語り出す……

大造

……智久は、実は教団にいたんじゃない。大学院飛び出して、わしの手の届かぬところへ……しかし、ちょうど一年前、まだこんな騒ぎが起きる前にそこを飛び出した……それから、智久からわしのもとへ手紙が届くようになった……すまんが、わしのしよいこを取ってくださいらんか……

茂木、大造のリュックサックを持つてくる。

大造、手紙の束を取り出す。

大造

このしよいこの中すべてが智久からの手紙じゃ。消印は様々だが、あて名は全てわし、裏には智久とだけ書いておる……智久は教団を飛び出してからの一年のうちにわしに毎日と言ってもいいほど、手紙をくれた。内容はまちまちじゃった……わしとの思い出のこと、おいしい食べ物のこと、海のこと、空のこと、人間のあるべき姿のこと、そして変貌していく教団のこと、それから抜け出せない信者のこと……毒ガス・爆弾・薬物……それが、一週間前この手紙を最後にはたりと来なくなつたんじゃない……

大造、震える手で手紙を取り出し茂木に手渡す。茂木、皆の顔を窺う。全員額くを見て、手紙を読み出す。

茂木

前略、おじいちゃん。僕は決めました。あの一年前に埋めたものを掘り起こしに行きます。仲間を救うにはこの方法しか無いとずっと考えていたのです。あ

れは無力な僕に与えられた、最後の魔法です。あれこそが救済なのです。僕にとつても、そして僕の仲間にとつても……きつと、すべてのものに平等な完全なる救済。これより他に、彼らを救う道はありません……

おじいちゃん、お元気で……さようなら。

智久

大造

智久は手紙に「さようなら」なんて書いたことはこれまで一度も無かった……だから、わしは居ても立ってもいられなくなつて……ここに来たんじゃない……智久がそれを埋めたと書いていた初めてくれた手紙の消印のこの場所へ……智久くんより先にそれを掘り返そうと？

大塚

……そうしないと、とんでもないことが起こるような気がするの。じいさん、ちよつとそれ見せてもらえないか？ あんたの掘り起こしたもの……

大造、小松に手に持っていた田筒状のものを渡す。それを眺める小松。

藤原

なんなんですか、それ？
分かん……（ネジが切つてある蓋を回そうとする）

小松

まさか蓋開けたら爆発するんじゃない……
三森、そういうことはもうちよつと早く言えよ……開けちゃったじゃんか！

小松

……小松さん、勘弁してくださいよお！
中にや、綿がはいってるぞ……

大塚

わた？
いや、綿だけじゃねえ。（中からアンプル状のものを取り出し）なんだこいつ

小松

は？
なんなの？

茂木

なんか字が書いてありますよ。

小松 そうだな。(読んで)・・・バチルス・アントラキス？

三森 なんじゃ、そら？

小松 ……完全救済・・・じいさん、あんたの孫、大学院で細菌学学んでたって言ったよな？

大造 ああ、そうじゃ・・・

小松 智久くん、とんでもねーもん盗んできちまったみたいだぜ！・・・三森すぐに車の準備だ！

三森 この吹雪の中？

小松 レンジローバーに怖いものなし！とにかくじいさんを病院へ、それからこいつを警察へだ。

茂木 一体なんなんですか、小松さん？

小松 バチルス・アントラキス・・・俺の記憶が正しければ・・・とにかく、三森エンジンかけろ！ キャサリン、もっくん、じいさんを車まで。藤原、皆の荷物を・・・

咲智 小松、一体血相変えて、なんだって言うんだよ・・・

小松 おまえは、俺たちの住居不法侵入の警察への言い訳でも考えてろ！ さあ、行くぞ！

皆、あたふたする。大造それを制して・・・

大造 ……ちよつと待つてくださらんか？ 智久がここに来るんじゃよ。わしには分かるんじゃ、あの子がそれを探してこっちに向かつてるのが・・・だからわしをここに置いていつては下さらんか？ ……ここに誰もいなければ、あの子はまた路頭に迷ってしまうじゃろ・・・

小松 なに言ってるんだ、じい！ これは普通の事態じゃないんだよ！ てめえのかわいい孫はな、こいつ使つてとんでもねえことをしようとしてたんだぞ。何が完全救済だ！

大造 違う、ほんとに智久はいい子なんじゃよ。迷ってるんじゃよ・・・ただ迷ってるだ

小松 けなんじゃ・・・頼む、小松くん。わしをここに置いてつて下さらんか？ 寝言いつてんじゃねえ！

大造 ……ここまで来たんじゃ、やつと智久のそばまで来たんじゃ。今までは助けようにも、どこに手を差し伸べていいか分からなんだ・・・ じゃが、今は違う。あの子はわしの近くにいる。こっちへ向かつてるんじゃ。今助けなんたら、一生・・・もう一生救つてやることは出来ん。だから、小松くん。頼む、この通りじゃ。(土下座をする)

小松 じい、頭あげろ！ いい歳こいた大人が、年端もいかねえガキに頭下げてどう

するんだよ・・・ 分かったよ・・・あんたのその一生のお願い、僭越ながらこの三流劇団ぼを・たんつが聞き入れましよう・・・

小松くん・・・

大造 小松以外の劇団員はなんのことやら合点は行つてないが、ただ大造にはちよいとほだされちゃつたみたいよ・・・そんな構図の中、舞台は唐突に暗転！

十四 黒き死の仮面

風の音。

舞台後方窓枠の向こうに男の影。智久である。窓枠から外に向かい明かりが漏れている。智久が手に持った巨大な番線カッターを振り上げ、太いきゃプタイヤを切る（飛び散る火花！）と、その明かりも消え、暗転。

乱暴に扉が開く音——と風の音大きくなる。

扉が音を立てて閉まる——沈黙、いや、小さな風の音。

舞台後方で懐中電灯の明かりが点り、そして揺らめく……

智久 いるんだろう？ 出てこいよ！ じいさん。大造さん！ さあ、こつちきなよ。あんたが見つけたもの持つて…… 全くこんな所であんたに邪魔されるとは思っても見なかったよ…… さあ、早く出てきな！

舞台前方の暗がりから声、「ようこそ、智久くん。」
懐中電灯が声の主を照らす。小松が腰掛けている。

小松 （傍らの蛍光灯の携帯カンデラを点けて）……なにも電源切っちゃうことないんじゃないの？ 鍵だつて掛けてなかったんだからさ。

智久 これは、これは……三流劇団の方ですか？

小松 いかにも、三流劇団ぽを・たんつの小松と申します。お初にお目に……

智久 はじめまして、小松さん……ところで、じいさんはどこだ！

小松 ちよつと今、伏せておるもので……

智久 伏せて？

小松 やつぱり心配かな？

智久 いや、僕が興味あるのは例のものだけだよ……

小松 例の？

智久 じいさんが拾ってきたもんだよ……とにかくそれは君達が持っていては立たないものだから……いや、危険でもある。

小松 危険？

智久 そう、とても危険なんだ。だから、こちらに渡してもらえませんか。

小松 とても危険つて、どれくらい危険なの？

智久 いいかい、君達の持つているそれはバチルス・アントラキスのスポアだ。

小松 ばち……何？

智久 バチルス・アントラキス……炭疽菌だよ。

小松 炭疽菌？

智久 炭疽菌の病原菌だよ。感染すると熱が出て、腫瘍ができ、死んじゃう。かなり

質の悪い菌でね、過去、細菌兵器として用いる計画も立てられた。

小松 細菌兵器？

智久 その菌は酸素に触れても死滅することがない上に、いったんスポアつまり胞子の状態になると乾燥に耐え土壌中で半永久的に生き続けることが出来る。

小松 そんなわけで、一旦ばらまかれると、根絶することが極めて難しいんだ。第二次大戦中、イギリスのポートン研究所において……

智久 分かった……某宗教団体が亀戸で散布したらしいつてやつか？

小松 某宗教団体？ はつはつは……そうだよ。でも、周辺に被害が出なかつたところ

をみると、どうやら彼ら培養に失敗したみたいね。全くしようがないよね、炭疽菌ごとき、培養できないなんて……その菌は僕が育てた、ちゃんと扱えるのは、

小松 きつと僕だけだよ……

智久 君が育てた？

小松 そうだよ、小松さん……だから、返してください。

智久 きみ、これ、何に使う気なんだ？

小松 完全救済。迷える魂の救済……君が言うところの某宗教団体とやらを救う

んだよ。ある者は高熱の中で夢見るように死に……またある者は、身体中に噴

出する腫瘍に恐れおのきながら、ひたすら祈り続ける……内臓が真っ黒に腫

れる……

小松 ……

智久 ……

小松 ……

智久 ……

小松 ……

智久 ……

小松 ……

れ上がり、そして柔らかな死の懷に抱きかかえられていく……

小松 智久くん、きみは、これを教団施設にばらまくつもりなのか……

智久 神聖なる土地はこれで、永遠に聖なる場所となる。だれ一人として汚すことができぬ、有刺鉄線で囲まれた巨大な墓碑銘……

小松 それが救いか？

智久 そうだ。……さあ、僕の菌を返してくれないか？ 危険なんだ、そのスポアを吸

小松 い込んだだけで肺から感染する。

智久 ……やつぱり、そんな危ないものだったのね？

小松 そうだ！ だから……

智久 返してあげたいのは、やまやまなんだが……でさんのよ。智久くん。

小松 かっこつけるんじゃない。そいつは僕の物なんだ！ 僕の菌だ！

智久 別にかっこつけてるわけじゃない……できないんだ、もう……

小松 もう？

智久 割つちった……

小松 えっ？

智久 割つちったの……ケースの中に入ってたガラスのアンブル……

小松 っ、今なんて言った！

智久 じいさんと取合はしてらうちに、割れちゃって、中に入ってたスポアとやら、この

小松 辺にぶちまけちゃった……

智久 ……ぶちまけた？

小松 (ガラス片を舞台中央に放り)ほれこの通り……

小松、カンデラを持って立ち上がり、辺りを照らす。

息も絶え絶えの大造じいさんが大塚に抱きかかえられている。そのほかの劇団

員たちは壁を背に座り込みげんがりしている。

小松 特別に、俺と大造じいさんスポア頭つから被つちやつてさ……

智久 おじいちゃん！ (と、駆け寄ろうとする)

小松 (制して) 近寄るんじゃないねえ！ お前のじいさん、もう感染してるよ。もう三

度ほど血を吐いた、喋る力も残っちゃいねえ……

大塚 小松。

小松 なんだ、キャサリン？

大塚 じいさん、すごい熱だよ。それに呼吸も……

智久 おじいちゃん！ (と、再び駆け寄ろうとする)

小松 (制して) 近寄るなつていったら！

三森 俺たち、死んじゃうのかな……

小松 やめろ、三森！

智久 ……うそだ！ こんなに早く発病するはずが……

小松 お前、試したことがあるのか？

智久 ……確かに炭疽菌は人の体内で爆発的に増殖する、でも！

小松 本の上の知識だけで、べらべら喋るんじゃないねえ！ これが……これが現実なんだよ。

小松

木暮崎 (ゆつくりと現れて)……小松、今の話、本当？ (ここに危ない菌ぶちまけちゃったわけ？ ……ぼくちんも吸つてる可能性があるわけ？ ハーっ……あのまま雪

の中で眠つていればよかったよ、剣さんは……うっ、寒気がする。こいつは尋常

じゃない寒気だ！ ……だめだ、熱が出てきやがったぜ……だめだ、どうやら

感染しちゃったらしい……小松、短いつきあいだったな……(どうと、倒れる)

小松 けっ、剣さん……

茂木 (茂木に)ほっとけ！ それより智久くん。どうにかする手立ては？

小松 ……

智久 ……

小松 手立ては？ このままだと、お前のじいさん死んじゃうぞ！

小松 ……

小松 ……

小松 ……

三森　そして俺たちも……

咲智　……やだよ、そんなのやだよ！

小松　やめないか、咲智。

智久　……とにかく、病院へ……

小松　病院？　それだけか……お前に言えるのは、たつたそれだけか……この菌はあん

たが育てたんだろ！　細菌学者なんだろ！

智久　……僕は、ただ培養しただけで……なんにも……

小松　泣かせるねえ、細菌学者さんよお！　「病院へ……」か？　そんなことならアヒル

だつて言えるぜ！　行こうにも行けないから言つてんだろ！

智久　行けないつて？

三森　……レンジローバーがいかれちまつてさ、うんともすんとも言わないんだ。

藤原　ここは離れ小島みたいな別荘なんです……近くの民家までは八キロもある。普

通に歩いて二時間、この吹雪の中だと……

小松　確実に死ぬ……さつきのラジオのニュースじゃ、今夜はこの冬一番の寒波が襲

うらしい。甲信越上空にマイナス三十五度の寒気団が張り出していて十三年ぶ

りの記録的大雪になるそうだ。

智久　電話は？

小松　こんな倉庫に電話なんかあるか！

智久　隣の別荘に……

三森　やつたよ……

智久　やつたつて？

三森　鎧戸壊せなかったから、わきの便所の窓叩き割つてさ……

茂木　三森さんが、中に入つて……

大塚　でも……切れてたんだよ、電話……

三森　ちゃんとしとけよ、藤原！　おめーの別荘なんだろ！

藤原　僕のせいじゃないですよ！

小松　やめろ！……智久くん、素人の俺たちに出来ることは出来ることはすべてやっ

た。手は尽くしたんだ……

木暮崎　小松う……（よろよろ立ち上がり）それつて、もうお仕舞いつてことじゃんか……

俺、智久くんの車のバッテリーもあげちゃつたしい……もうだめつてことじゃん

か？　三森、ぼくちん死ぬの……こんな倉庫の中で死んじゃうの……

茂木　剣さん！

小松　もつくん、馬鹿に構うな！

木暮崎　ばか？　そう、馬鹿だから風邪ひいたこともなかったのに……でも、炭疽菌には

感染しちゃうよね……きつと……（倒れ込んでいく）

大塚　智久くん。あなたが、最後の望みだつたんだよ……　じいさんが、あなたなら助

けてくれるつて、賢い子だからどうかしてしてくれるつて……

大造　……智久。

智久　おじいちゃん！

大造　……やつと会えたの……おじいちゃんな……ダウジングロッドでな……探し当てた

んじやぞ……こつちへ来て、顔をよく見せておくれ……

智久　おじいちゃん！（駆け寄る）

大造　智久……

と、大造激しくせき込む。タオルを優しく唇にあてる大塚。タオルが真っ赤な鮮血で染まる。

（大造が苦しそうに言葉を継ぐとするのを制して）もう喋らないで！……いいよ、もう、ひとこと喋るたびに魂が削れてくんだもの……

智久　……どうして、どうしてこんなことに……

大塚　どうしてだつて……あなた、よくそんなことが言えるね……もとはといやあ、あ

んたが……（激しく咳き込み、反射的に口にあてがったタオルを凝視する。そこ

には真っ赤な鮮血！）……小松、とうとう来ちまつたよ……血吐いちまつた……

小松　キヤサリン！

智久 ……小松さん、抗毒素を使いましょう。

小松 抗毒素？

智久 血清みたいなものです……まだ効くかどうか分からないけど……症状を緩和できるとは……でも……

三森 血清があるのか？ どこに？

智久 だから、このスポアと一緒に埋まっていたでしょう。赤いキャンプの……

小松 赤い？

智久 それと一緒にあったはずですよ。その中に抗毒素が……

小松 じじいが出てきたのは、これだけだぞ……

智久 ……ちよつと待ってください、僕確かに……一緒に……

三森 つてことは……

咲智 まだ、埋まってるの、あそこには？

小松 それだ！ 救いあつたじゃないか、智久くん！

藤原 それで僕たち助かるんだ！

茂木 剣さん、聞きましたか、今の？

木暮崎 ……もつくん、剣さん。もう何も見えない……何も聞こえない……そして、何も感じないのさ……

茂木 剣さん！

小松 もつくん、藤原、三森！ お前ら、まだ身体動くよな？ (三人、頷くのを見て)

智久 すまんが、そいつを掘り起してきてくれないか？

小松さん、その抗毒素は……

智久 効くか効かねーかは試してみねーと分からないだろ！ 頼むぞ、お前ら……

三森 藤原、コートとつてくれ。

三森

コートを羽織る三人。

茂木 (智久に) さあ、その場所に案内してください。

智久 でも、こんな真つ暗やみの吹雪の中じゃ……

咲智 ダウジングロッドがあるだろ！

智久 (ポケットからダウジングロッドを取り出し、見つめる)

咲智 そいつで見つけられるじゃん。

智久 こんな針金で……

咲智 あんたのじじいはそいつで見つけたんだぜ！ ……信じるんだよ。心に強く念じれば……

三森 行くぞ、智久くん。藤原、シヤベルを……

藤原 はい。(三森にシヤベルを渡す)

茂木 行つてきます、小松さん。

小松 気を付けろよ。

大塚 智久くん、これ持って行きな！ (何かを投げる)

智久 (つかんで) お守り……

大塚 厄除けだ！ 正月に川崎大師で厄払いした時にもらったんだ。全く、とんだ厄

年だよ……

藤原 厄年つて？

茂木 三十三？

大塚 かぞえてな……とにかく早く行きな。そして早く帰つてこい！

三人と智久、意を決したように出ていく。

三人と智久、意を決したように出ていく。

三人と智久、意を決したように出ていく。

三人と智久、意を決したように出ていく。

三人と智久、意を決したように出ていく。

小松 ……外は吹雪だ。

咲智 ……(考え込んでいるが、急に立ち上がり、窓枠に駆け寄る。)

木暮崎 ……ぼくちん死ぬのね。ああ、幼年期の記憶が走馬灯のように……ああ、熱で喉がひりつくようだよ……

小松 咲智、剣のためにロッカーの中からトマトジュースを持ってきてくれ……

頷き、駆け去る咲智。
暗転―風の音。

十五 誰がために血清はある

風の音。懐中電灯の光。
ゆつくりと明転。

藤原 こつちの方向でいいんですよね。もうだいぶ来たけど……

三森 ああ、そうだよな、智久くん。

智久 ええ。

藤原 畜生、夜になると、ほんと西も東も分からなくなる。

三森 しかし、なんなんだよ。この雪は……と、茂木がもたれかかってくる……おい、

大丈夫か、もつくん。

茂木 大丈夫です。

三森 お前、熱出てきたんじゃない……と、額に手を当てようとする（

振り払って）大丈夫です。（……でも、とても大丈夫なようには見えない）

智久 ここだ！ ここから森の中に入ります。雪が深くなっているから気を付けて。

藤原 この辺りは、地形がうねってますから、リッチつてやつです。気を付けないと埋

まっちゃうですよ（つて言ってるそばから、埋まっちゃう） わっ……

三森 藤原！（きよろきよろして）いない！（雪の中を手探りして）藤原！

藤原（ぶはつと出てきて）すいません。足滑らしちゃつて、ここの下すごく深くなつて

ますよ……

三森 気を付けろよ。

茂木 （不意に倒れる）

三森 もつくん。（目を閉じている茂木を揺り動かして） もつくん！ ……すごい熱

だ！

茂木 すいません。でももう動けそうにない……

藤原 どうしよう、三森さん。

智久 ……戻りましょう。

三森 何言ってるんだ、ここまで来て！ 血清がなきゃ、どうせ俺たちみんな… 藤

原、お前もつくん連れて倉庫に帰れ…

智久 この雪じゃ、一人で運ぶのなんて無理だ！

三森 無理は承知だ！

吹雪がいつそう強くなる。うずくまる三森、藤原と智久。

気付くと後方に咲智が立っている。

咲智 もつくん！

茂木 咲智さん…

咲智 大丈夫？（茂木に駆け寄る）

三森 咲智、どうして？

咲智 心配で…

三森 お前が来たら心配が増えるだけだろう！

咲智 もつくん、私が連れて帰るから… だいじょうぶだよ、こう見えても力はある

んだ… 子供じゃないんだよ。子役なんかじゃないんだよ…

藤原 咲智さん…

咲智 藤原、いいから、早く行きな。もつくんは、あたしに任せて…

三森 （先ほどからポケットに片方だけ突っ込まれていた咲智の右腕を引き抜くと、

そこに握られているのは血の付いたハンカチである）… 咲智、お前。こんな身体

で… なんてこんなとこまで来ちまったんだよ！

咲智 待つてるのって好きじゃないから… だつて、つらいんだもん。待つてるのつらいん

だもん… （咳き込み、血痰を吐く）

茂木 咲智さん…

咲智 …… もつくん、大丈夫だからね。あたしが来たから、もう大丈夫だからね…

藤原 （肩に担いで茂木を運ぼうとするが、力尽きてしまう）

咲智さん！

三森 藤原、お前ここに居ろ！ 俺たち、血清見付けてすぐ戻って来るから… 血

清さえあればどうにかなるんだ！ 智久くん、もう近くなんだろ？

智久 この林を抜けると、急に開けたところがあつて… でも！

でももくそもあるか！ 行くぞ！ 藤原、すぐ戻る… （駆け出す）

三森 智久さん！

叫ぶが三森は戻って来ない。藤原の顔を見る— 頷く藤原。

駆け出す智久。風の音高鳴る。そして一瞬の暗転。

風の音。舞台の上には三森と智久。

三森 …… 林を抜けたぞ！ この辺りなんだろ？

智久 …… 分からない、真っ暗で分からないんだ…

三森 ダウジングロッドだ！

智久 （ダウジングロッドを手にするが）…… こんなもので見つかるはずがない。

三森 心に強く念じるんだよ。

智久 （ためらうが、ダウジングロッドを平行に持ち目を閉じる）…… 震えてる、ダウ

三森 ジングロッドが震えてる…… なぜだ？

三森 じいさんだつて、これで見付けたんだ。

智久 …… こつちだ、もうすぐだよ。（ゆつくりとロッドが開いて行く）…… 開いてく。三

三森 森さん、そこだ、その窪地だ！

智久 ここか！（猛然と掘り始める二人）…… 血清だ！ これで助かる…… おつ、土が

三森 見えてきたぞ！ ここからはそつとだな…

智久 …… ちよつと待つて！ 懐中電灯を… （屈み込んで、手で土をほじくる）…… こ

三森 れだ…

三森 やった！ やったぜ！ これでみんな助かる…… さあ、早くみんなのところへ！

（たり込む）

智久 み、三森さん。だいじょうぶですか？

三森 ちよつと無理しすぎたかな。血清見付けたら、緊張の糸切れちまった……実は、だいぶ前から体調がすこぶる悪くてな……菌のせいかな？

智久 しつかりしてください。今、これ抗毒素うちますから……効けばいいんですが……(動きが止まる)でも、これ一人分しか……

三森 ……一人分？

智久 そうだった……一人分しかないんです。言おうとしたんだけど……切り出せなくて……

三森 切り出せなかったって、お前……じゃあ、せつかく掘り出したのに、みんなを救えねえってわけか？ 冗談はよしてくれよ。

智久 冗談なんかじゃない……

三森 ……はっはっは、こういうオチか？ こういうオチなのかよ、神様。……(咳き込む)

智久 (三森さん！……だから、これを……)

三森 ばかやろう。一つしかねえものを俺に使ってどうするんだよ。じいさんに打ってやりな……

智久 どうして……

三森 ……じいさんな、血吐きながら、こんなこと言ってた……二十一世紀になったら、

智久と一緒にタイムカプセルを掘り返すんだって……約束したんだって……うわごとのように繰り返し返してた……それだけが、じいさん支えてた。そんなちゃんけなもんで生き続けてた。俺は三流劇団の人だから……ちゃんけなもんほど価値があるような気がしてさ……あと五年じゃやねーか？ たった五年だよ……長生きさせてやれよ……夢叶えてやれよ……俺、もう動けねえから……さあ、それだけ持つて早く行け……

智久 (首を横に振る) 出来ません。……今、藤原くんを呼んできます。

三森 もつくん、咲智そして俺……死人みたいの三人抱えて、藤原とお前だけで、この雪の中どうしようって言うんだよ……余計なこと考えねえで、早く行きな！

じいさん死んじまうぞ。

智久 (首を横に振って) だめです。みんな生きなきや、どうにかして生きなきや……(三森が瞳を閉じるのをみて) 眠っちゃだめだ！ すぐ藤原くん呼んでくるから！

駆け出す智久。風の音。降り積もる雪。人形のように動かぬ三森。ゆつくりと暗転。風の音が闇を支配する。

十六 最も有効な解決策

暗やみの中、ドアの開く音。倉庫に吹雪が舞い込む。

ゆつくりと明転。智久が立っている。

舞台の上には、小松、木暮崎、大塚がへたり込んでおり、その傍らに大造が横たわっている。

智久 ……やつぱり、いない、帰ってない…小松さん、助けてください。三森さんが穴の底で倒れて…それから藤原くんも吹雪の中で見失ってしまった。他の人も…だれも…みんな見失ってしまった…だから、小松さん。助けに行かないか…みんなを助けに行かないか…

小松 ……

智久 ……小松さん、お願いします。

木暮崎 小松はもう動けないよ…

智久 剣さん…お願いします。みんなが雪の中で…

木暮崎 ……だめなんだ。俺もどうやらやられちゃったらしい…ばかは感染しやすいのかね、これ？

智久 そんな！

小松 ……智久くん、もういいんだ。

智久 何が「もういい」ですか？ このままだと、みんな凍死しちゃう…雪の中で、みんな…

小松 もう遅いよ…みんな、くたばっちゃってる…

智久 何言ひ出すんです！

小松 ……じいさん、死んだ。……じいさんが死んだんだ。遅かれ早かれ、俺たちも…

智久、抗毒素の入ったケースを取り落とす。ケースが転がる…

智久 そんなばかな…

大塚 じいさん、耐えられなかった……じいさんの身体、菌に負けちゃった…

智久 おじいちゃん！

大塚 (駆け寄ろうとする智久を制して) 近寄るんじゃないよ！ てめーが殺したんだろ！

智久 僕が殺した…

大塚 そうだよ！

小松 やめないか、キャサリン！

木暮崎 (その間に、ゆつくりと抗毒素の入ったケースを拾い上げ)……これか？ これが血清か？

智久 ……

木暮崎 これさえ打てば、俺たちみんな助かるんだよ…智久くん？

智久 ……

木暮崎 智久くん？

智久 ……抗毒素は一人分しかありません。

木暮崎 なんだって？ 一人分ってお前、それじゃあ……おい、聞いたか、小松？ 今の聞いたか？

小松 ああ。

木暮崎 ……じゃあ、誰が打つんだよ。俺か？ おまえか？ キャサリンか？

大塚 あたしはいいよ、身体がもちそうにない…

木暮崎 そうだよな、この中で一番、元気い奴が打つべきだよな。なあ、小松。お前みて…な死に損ないが打ったって、(急に膝から力が抜ける) むだに……なる……

小松 だけよ…

小松 剣！

木暮崎 はっは……死に損ないは、俺か？ ……智久くん。お前、うて…

智久 剣さん…

木暮崎 お前が一番元気そうだ…

小松 智久くん。それが一番いい……

智久 なぜ？

小松 君は責任を全うしなきゃならないだろ？ ……剣、最悪のシナリオだ！ 灯油をまいてくれ……

智久 灯油をまく？

木暮崎、灯油のタンクを抱え、ふらふらしながらも、灯油を床にまき始める。立ち込める鼻をつく臭い。

智久 ……何するんです。剣さん、なんで灯油なんか！

小松 これが、俺たち凡人が考えついた最後の解決策なんだ。汚染されたこの部屋ごと、殺菌する。

大塚 あたし達も一緒にね……

小松 さすがの炭疽菌だつて、炎の前にはひとたまりもないだろ？ ……じいさんが息引き取ったとき、三人で考えたんだ。菌の蔓延をこれ以上広げないためにね……

智久 そんなことしたら、みんな……

大塚 みんな、死にかけてるんだよ……

智久 だめだ、何かほかに方法が！

小松 やるだけやっただろ……ぐずぐずしていると、この菌が蔓延するぞ！ この数時間での被害だ、このまま放置しておいたら、どうなると思う？

木暮崎 (智久の方へマッチを放り)……五反田のランプでもらったマッチだ。こいつで火をつけてくれ……

智久 (マッチを拾い……だが、首を横に振る)

木暮崎 ……全く、野良犬みたいな人生だったね、ほんと。智久くん。結局けいこさん救いに行けなかったな……まあ生きてたところで、救えたかどうかなんて分からねえけどな……(咳き込んで、血痰を吐き……か細く、「野良犬」を口ずさむ)

小松 ……智久くん。火をつけるんだ。……この倉庫が焼け落ちるころ、きつと夜が明け始めるだろう。そうしたら村まで走れ、もし症状が出てきたら、それ打つて……とにかく走れ、そしてこのことを誰かに伝えるんだ。

智久 ……嫌だ、僕もここで死ぬ。

小松 何言つてやがるんだ！ お前には責任がある。この悪夢を引き起こしたんだぞ！

智久 だから……

小松 死ぬのは責任回避だろ！ 誰かに伝えるんだ。君なりの方法で……これ以上被害を広げない方法でな……君は俺たちと違って科学者なんだから、落ち着いて対応できるだろ？ さあ、火をつけるんだ。

智久 できない……そんなことできない……

木暮崎 早くしろよ、おれが「野良犬」歌つてるうちに頼むぜ。俺、怖がりだからさ……早くしねえと、恐怖がよ……

智久 出来ない！ まだ、生きてるじゃないか！ 剣さんも、小松さんも、キャサリンさんも！

小松 完全救済だよ。俺たちを救うんだよ。

大塚 あたし達だけじゃなく、すべての人々をね……

智久 救済なんかじゃない！

小松 火をつけろ！

智久 (首を横に振る)
火をつけろ！

木暮崎 ……おじいちゃん、僕はどうすればいいんだ？

大塚 おじいちゃんは死んだよ……あんた一人でやるんだ。

小・木 早くしろ……

智久 ……できない……僕にはできない……

膝から崩れ落ちていく智久。

小松、ゆつくりと立ち上がり、智久の方へ歩んで行く。そして肩に手を乗せ、ぼつりと呟く……

小松 ……やっぱり、誰も殺せねえじゃんか。

智久、顔を上げ小松を見る。小松、智久の肩をたたき、そして、やおら顔を上げ、叫ぶ……

小松 はい、ここまで！

全員の緊張が解ける。

智久 ……

小松 ……さあ、カーテンコールだ！（外に向かって）もっくん、明かり点けてくれ！

舞台袖より、「はい！」という茂木の声。と、眩しいほどの照明が舞台を照らす。舞台袖から、茂木と咲智が出てくる。

茂木 ……智久くん、ケーブル完璧に切っちゃったから……

咲智 直すの大変だったぞ！ それに小松、外の寒さたるや……血のり用のトマトジュース凍ったぞ……

智久 (二人の顔を見る)……

小松 三森は？

三森 (舞台袖から、藤原に肩を支えられて登場)ここにいますよ。

小松 大丈夫か、三森？

三森 だいじよび……でも本当に死ぬかと思っただぞ。藤原に助けられなかったら……

藤原 僕の「雪泳ぎ」のおかげですよ……

三森 ほんと、お前がその技をあみだしてよかった……

智久 ……三森さん。

小松 みんな揃ったところで、全員整列！（全員整列する）……たった一人のお客のための即興劇、これにて幕とさせていただきます。（礼をする）

全員 (礼をして)ありがとうございました。

智久 即興劇……

小松 全部、芝居だ。……ガラスのアンブルが割れたてーのは嘘だったんだ。（アンブルを取り出して）ほれ、この通り……別に騙そうなんて気は……

大造 ……そうじゃ、智久。おじいちゃん、この人達にわがまま言つての……そしたら、

大造 こんなことに……

智久 おじいちゃん……よかった……

大造 ……騙すつもりなんかなかったんじゃ、ただ……（智久の方へたまた歩いていく

が、その途中で力なく倒れてしまう）

おじいちゃん！（駆け寄る）

大塚 (駆け寄つて)……やっぱり、すごい熱だよ！

小松 じい、だから、わがままは自分の身体に聞いてからしろよな……三森、レンジロ

ーバーの準備を！（駆け出す、三森）藤原、もっくん、じいさん運ぶの手伝

え！

智久 おじいちゃん……

大造 わしは大丈夫じゃ……ちよつと無理したんでの……

智久 おじいちゃん……僕は……僕は……

大造 智久……おじいちゃん、死にながら、お前の話すことをずっと聞いた……お

前は、やっぱりいい子じゃ……

三森 (舞台袖から)小松、準備できたぜ！

小松 今行く！……智久くん。一応これ返す。（スポアのケースを差し出す）

大塚 何言つてんだよ、小松！

小松 これは、智久くんのだろ……

大塚 でも、それは…

小松 人もんは人のもんだろ！ 俺たちは岡つ引きでも、お奉行様でもないんだよ。

奪い取つたり、裁いたりは出来ないだろ！ 俺たちはただの三流劇団の人達なんだ。これは智久くんのもの！（智久に渡す）煮るなり焼くなり、ばらまくなり…好きにしろ！

大塚 でも、警察に…

小松 警察？ 何故？ …炭疽菌なんて舞台の上だけの話だろ…なつ、智久くん？

智久 小松さん…

小松 （智久が何かを言おうとするのを遮り、肩をたたいて）さつ、行こう…

大造じいさんを抱え、皆舞台から退場しようとする。と、木暮崎が小松の肩を掴み…

木暮崎 …小松。ちよつと額に手を…

小松 （額に手をあて）…すごい熱だな…薄着ではしゃいどるからじゃ！

木暮崎 いや、こいつは尋常じゃない…もしかして菌？

小松 …死ぬまでやつてろ！（退場）

木暮崎 こまつうー（退場）

暗転です。

十七 お早いご帰還ですね

愉快的な音楽。ゆっくり明転。劇団員、皆レンジローバーに乗っている。

茂木

（ナレーション）…悪夢の一夜が明けました。昨日の吹雪は嘘のよう、すかっと晴れ渡っています。大造じいさんと智久くんは富士吉田の救急病院にいます。私たちはと言いますと…この通りレンジローバーで中央高速を飛ばしています。お早いご帰還というわけです。一体この合宿は何だったのでしょうか？—そんなことなんかお構いなしに車に乗るとはしゃいでしまふこの人たち…先行き、いろんな意味で不安です…特に昨夜熱だしてたはずの剣さんなんか、病院でのたつた一本の注射で、もうこの通り…

木・大

（声あわせて歌つてる）もとす、しようじん、にしのうみい

藤原 それは、富士五湖の歌！ …ほんとにあつたんだ！

木・大 あたぼうよ、小学校のバス遠足のとき、ガイドさんが…気が合うね！

木暮崎 さあ、もつくんも歌おう！

茂木 あんなことがあつたつていうのにこの人たちは…

小松、なにやつてんだ？

小松 本書いてんだろ、本！

咲智 また吐くぞ！

小松 だいじょうぶでーす。今度はちゃんと食べてきたから…

咲智 そうでなく、そうやって俯いてるのが…（つて、言つてるそばから、小松一口ゲ

）吐いた…飲んだ！

小松 未消化のインスタント麺の喉ごし最高！（でも、涙目）

三森 小松、その談合坂で休憩していくか？

小松 うん。

木暮崎 三森、ナイス！

三森 何がナイスなんだよ？

木暮崎 剣さん、忘れるところだったよ…

藤原 そうだ！ カマロだ！

木暮崎 ご名答！

車がランプウェイを曲がる。みんな「きゆるきゆるきゆるきゆる」と言いながら斜めに傾く。

木暮崎 だめだぞ、三森。ランプウェイは一般道と同じ…だから制限速度にしたがって走らなきゃね。

咲智 剣に説教されてやんの…

三森 うむ。(うむじゃないだろう)

木暮崎 よし、着いた。とう！ (と、車の外に飛び出し) ほほう、ここは上り下りが同じ側にあるじゃねーか…それに天気も上々！ 神様は、全面的に俺の味方って感じだな！ じゃ、俺、これからカマロで行くから…

茂木 行くからって…そつちは下り線ですよ。東京には…

木暮崎 分かっているさ、もっくん。おいら忘れ物しちやってよ。

茂木 忘れ物？

木暮崎 こいつを届けようと思ってよ…(ジャケットの内ポケットから何かを取り出す)

茂木 それは…

全員 芝居のチケット！？

藤原 どうするんですか、それ？

木暮崎 けいこさんに渡そうと思ってな。

藤原 けいこさんって？

木暮崎 教団の人だ！

三森 渡せるわけないだろ。それに…

木暮崎 そんなのやってみなきゃ分からんだろ！ …小松、俺は、俺なりの救済方法

を発見した…それが、これよ…何せおいらは、劇団の人。芝居でけいこを救うのさ！ (駆け出そうとする)

大塚 ちよつと待つて！

木暮崎 あんたですら、俺を止められねえ…

大塚 もしかしたらそのけいこって…だから、あたしも連れてって。

咲智 キヤサリン！

木暮崎 だめだ！ (走り去る)

大塚 連れてけ、こら！ (追いかける)

小松 こら、キヤサリン！！

皆ぼうぜんとして、ばか二人を眺めている。

咲智 行っちゃたぞ、ばか二人…

小松 うん。

三森 あつ、剣が車に乗り込んだ…

藤原 キヤサリンも負けじと乗り込んだ！

咲智 喧嘩してる、喧嘩してる…

三森 剣、諦めた！

茂木 発進しましたね…

ほんど、時速十五キロぐらいで走ってるぞ…

おい、藤原。見ろ、カマロの横っ面！

全員 あーっ！！

小松 …見事なストライプが入ってる！

藤原 あーあ、げんなり…

愉快な人達…でも、暗転。

十八 お見舞いは缶詰めセットで

明転。ここは富士吉田の病院。大造がいる。
その傍らで必死に書き物をしている小松。

大造 小松くん。何書いてるんじや？

小松 脚本。こうやって言葉が浮かんできたときに書き取っておかないと、すぐ蒸発しちゃうもんでな……悪いね、せつかく見舞いに来たのにな……そのコクブの缶詰めセット、ちゃんと食えよ。

大造 ああ、わざわざすまなかったね、あんなものまでもらって……

小松 気に入んな。取材旅行でこの辺りまで来たんだから、見舞うのは当然だよな……メロンか缶詰めセット持ってよ。

大造 取材ということは、今度の芝居はここが舞台なのかい？

小松 まーな。……ところで、智久くんは？

大造 ……

小松 (ふと、顔を上げ)……どうしたんだよ？

大造 智久……また飛び出してしまつての。

小松 いなくなつたのか？

大造 ああ、きつと、両親に会うのがいやじゃつたんだろ……

小松 退院したら、また探すのか？ これ……(ダウンジングロッドの仕草)

大造 それは分からん……

小松 困つた、お兄さんだよ、全く……(また書き始める)

大造 ……小松くん？

小松 なんだ？

大造 いや、なんでも……

小松 何なんだよ、じじい。そうだ、おめーは缶詰めでも食つてろ。……そんなかに琵琶の缶詰めとかあつたらう？ 琵琶だぞ、琵琶。すごいね……

……「ツタの絡まるシヤベルで、俺たちは何を掘り起すのか、錆びにまみれたシヤベルで、一体何を掘り起すのか……」
何言つてるんじや？

大造

小松 あつ、わりいわりい。脚本だよ……と、音の洪水は鎮まり舞台は急速に暗転する……お・わ・り・つ・と……はっはっは……

大造 どうしたね、小松くん？

小松 はっはっは……脚本上がった！ というより、上げた！

大造 ……終わったのか？

小松 終わった、終わった。喜べ、じじい！ (と、二人でスキップ)

大造 ……こら、わしや病人だぞ！

小松 すまん、すまん。……とりあえず、これ。(とチケットを渡す)

大造 なんじやこれは？ ツタの絡まるシヤベルで……んー、ペギー葉山か？

小松 なんじやそら！ そいつは今度の公演のチケットだ。もうすぐなんだが、早く退院して見に来い。じゃあな……(と、出ていこうとする)

大造 もう行つてしまうのか？

小松 列車の時間でな……

大造 (急に真顔になつて)小松くん……

小松 なんだ？

大造 ……わしは何を間違えたんじやろう？

小松 間違えた？

大造 智久はどうして、あのような……それはわしが……

小松 じじい、あんたは何も間違えちゃいない。あんたは智久くんを愛してた……どんなことがあつても信じ続けてた。……それで十分じゃんか？

大造 じゃが、智久は……

小松 愛された人間は同じように人を愛することが出来るし、信じられた人間は人を信じ続けることが出来るだろ？ ……じゃあな。(去る)

大造 小松くん……

しかし、舞台上に小松はもういない。一人立ちつくす、大造。

十九 てめえ自身で掘り返せ、ツタの絡まるシヤベルで…

立ち尽くす大造をサスが捕らえている。
舞台後方に咲智と三森が現れる。

咲智 小松、本上げたって…

三森 ほんとかよ！ はえーな…

咲智 はい。これが、それ！（紙の束を渡す）

三森 結構な量じゃん。（ばらばらめくって）…「さあ、みんな、本栖湖で合宿じゃ！

おー！」…なんじゃ、こら？（ばらばらめくり、三森の目が先頭のページに釘付けになる）…ちよつと待て、これ、あたま…「ぶるとでどっかん」じゃんか！

三森・咲智ストップモーション。

茂木が現れる。それを追うように藤原。

藤原 もつくん。小屋入りまで、もうすぐ…初舞台だからけっこどきどきするだろ？

茂木 うん。でも…

藤原 何だよ、自信なげだな…あんな長い独白までもらってるってーのに。

茂木 独白って…幕前の挨拶だよ。

藤原 それでも立派な台詞だろ！ 自信持ってやらなきゃ！

茂木 そうだよね、自信持ってやらなきゃね…僕、舞台に立つんだから…

藤原・茂木、遠くを見つめてストップモーション。

舞台後方に、木暮崎・大塚。

木暮崎 ……もうすぐ開演だな。

大塚 ああ。

木暮崎 来るかな？

大塚 誰が？

木暮崎 けいこ…

大塚 結局渡せなかつたらう、チケット。だから…

木暮崎 来るよ…信じるんだ。俺は信じてる…今日でなければ、明日。明日じゃなければ、あさつて…

大塚 半年後、一年後…

木暮崎 二十一世紀になつても信じ続けてる。…さあ、開演だ！ 行くぞ、キャサリン！

勢い込む二人—ストップモーション。

大造がゆつくりと口を開く。

大造 ……小松くん。実は、智久から手紙が来たんじゃ…

智久が現れる。

智久 ……前略、おじいちゃん。突然いなくなつてごめんなさい。僕は今、おじいちゃん

のいるところからさほど遠くない町で、彼らの救済について考えています。実はある人の仲介でボランティアみたいなのをやっているんです。…これが正しい

ことなのかどうか、僕はまだ結論を出し切れていません。だつて、完全解答というものはこの世に存在しないから… 解答を見つけたと勘違いした時点で人の思考も停止することになるから…

大造 人は永遠に悩み続ける生き物じゃからの…

智久 だから、僕は考え続けることになるのでしよう、この仲間達とともに…僕は

人生のどこかで、僕自身を放棄してしまつた。「真の自分」を埋めてしまつたのです。…今、それを掘り返さなきゃならない、それを見つけて出して…(ダウジングロッドを取り出す)

大造 智久、それは…

智久 すみません…おじいちゃんのダウジングロッド、持つてきてしまいました。…でも、これを探せるんだよね、僕が埋めてしまつた「僕自身」を…

大造 そうじゃ、心に強く念ずればの… 呪文も修行もいらぬ超能力じゃ、ただ、強く念ずるだけでいい…

智久 ……僕はきつと、見つけ出すと思う。自分自身を、そして、失つた全てのものを取り戻す方法を…多分、そんな遠くない未来に… そうしたら、おじいちゃん。二人であれを掘り返そう…僕らが埋めたタイムカプセルを…二十一世紀に、あの場所で…

大造 小高い丘のてっぺんが、遠くの大きな山の頂とちよど重なるところ…

智久 永遠のあの場所…

大造 わしただけが知るあの場所…

智久 おじいちゃん、身体に気を付けて… また手紙書きます。

大造 同じ空の下より、とりのそぎ。

智久

大造 咲智にサスが降りそそいでくる。咲智のタンバリンが間欠的なリズムを刻みはじめ、ドラムが重なる。

小松が登場する。気合いが入っているようだ…

大造 ハゲたおやじの教訓的実践的人生哲学の物差しで計り取られ、意味のない「客観的」数字で評価される中、俺たちは大切な物を土に埋めた。もしあんたが今悩んでいるなら、それを掘り返せ。心の奥底に深く埋められた自分自身を… 「真理」なんざ、人に教えてもらうものじゃねえ、てめえ自身で掘り返

小松

大造

智久

大造

すもんだ、ツタの絡まるシヤベルで…永遠に…

お決まりのライブ演奏が怒涛のごとく舞台を埋め尽くす。

「ツタの絡まるシヤベルで」

闇夜のマリオネットファクトリーでは

6本指の子供たちが列をなして

行き着く先には、電飾だらけの裁断機

過剰なものは地の底で

息もせずに眠るだけ

鳥は空を飛ぶのと引き換えに

自分の名前を土に埋めた

人は生きていくために

たくさんの夢を深く埋める

俺たちは土の下に

一体何を埋めたのか

退屈の連続の中で

一体いくつ埋めたのか

きつと真新しい鉄のシヤベルで

何を埋めてしまったのか

5本指の子供たちが鎖につながれ

むせ返るような霧の中へと歩いていく
行き着く先には、赤く染まった圧搾器

失った指は地の底で

掘り返される夢を見る

黒い影に隠された

ここより先の闇の向こうを見るために

殺人ノイズに満たされた

ここより先の微かな音を聞くために

ツタの絡まるシヤベルで

俺たちは何を掘り起すのか

錆びにまみれたシヤベルで

一体何を掘り起すのか

朽ちた木の柄のシヤベルで

一体何を掘り起すのか

と、音の洪水は鎮まり、舞台は急速に暗転する…

(「ツタの絡まるシヤベルで…」 おわり)

記録

初演 一九九六年二月二日～六日 池袋シアターグリーン

作・花田智 演出・矢作勝義

出演／小松和人・川上琢史 三森信・すずきこーた 茂木公一・小山昭彦 藤原時起

夫・宮代鉄也(AMO) 小笠咲智・鈴木サエ子 キヤサリン大塚・原麻理子

木暮崎剣・高橋彰規 伊藤大造・矢作勝義 伊藤智久・花田智

問い合わせ先

演劇レーベル Bō-tanz

〒201-0013

東京都狛江市市元和泉 2-15-15-205

<http://bo-tanz.org>

shinada@me.com